2011

復興支援ボランティア派遣報告

第１期～第７期

岩手県遠野市から沿岸部へ

派遣ボランティア総数 136 名

調布市社会福祉協議会

目次

第 1 期派遣　平成 23 年 07 月 17 日（日）～ 07 月 20 日（水） 2

参加者の感想（第 1 期）

第 2 期派遣　平成 23 年 09 月 21 日（水）～ 09 月 24 日（土） 7

参加者の感想（第 2 期）

第 3 期派遣　平成 23 年 09 月 28 日（水）～ 10 月 01 日（土） 14

参加者の感想（第 3 期）

第 4 期派遣　平成 23 年 10 月 05 日（水）～ 10 月 08 日（土） 23

参加者の感想（第 4 期）

第 5 期派遣　平成 23 年 10 月 12 日（水）～ 10 月 15 日（土） 29

参加者の感想（第 5 期）

第 6 期派遣　平成 23 年 10 月 19 日（水）～ 10 月 22 日（土） 41

参加者の感想（第 6 期）

第 7 期派遣　平成 23 年 10 月 26 日（水）～ 10 月 29 日（土） 52

参加者の感想（第 7 期）

第 1 期派遣　平成 23 年 07 月 17 日（日）～ 07 月 20 日（水）

作業内容
- 1 日目
  - 大槌町小槌川河川敷
    灯籠流しの会場整備のため草刈りや瓦礫拾い、整地作業
- 2 日目
  - 前日と同様の作業と川底の瓦礫拾い

参加人数　16 人（女性 5 名　男性 11 名）

引率者　産業振興課 渡部 孝幸（調布市）
市民活動支援センター 朝日 敏幸（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第 1 期｜第 2 期｜第 3 期｜第 4 期｜第 5 期｜第 6 期｜第 7 期

参加者の感想（第 1 期）

井ノ口　信幸

７月１７～２０日と被災地復興ボランティアに参加させて頂きました。

実際に被災地に行きますと、ボランティアの必要性がまだまだあるのがわかりました。

私達が今回させて頂いたのは、灯籠流しをするための河川の草刈りや清掃でしたが、流れている川の底には屋根瓦やドア、タイヤなど津波の爪痕がまだまだ残されていて、復興が思うように進んでいない現状がよくわかりました。

復興活動をするにあたっての弊害が「熱中症」と、ヘドロなどに混じっているバイ菌による「感染症」です。

活動現場には必ず最低水２リットル(頭や首にかけるなど含む)、持っていくように言われましたし、活動後には道具や長靴、体に付いた泥や砂をキレイに洗い流しました。また、擦り傷など少しのケガでも感染症予防の為に隊長に報告するようにと、それとハリキリ過ぎない、無理をしない事、これらは「必ずお願いします。」と何度も言われました。

私達、全国の人達が少しずつ、少しずつ、たすきリレーをする気持ちで被災者の方々の１日１日を支えて行く事が、まだ終わりの見えない復興への長い道のりを乗り越えて行く一番の方法だと、私はそのように感じました。

まごころネット事務局のボランティアリーダーの方々も一般参加のボランティアの方々で、事務局に寝泊まりしながら、この厳しい復興活動を長い間毎日されているという事でした。

そのような方々にも出会い、一緒に活動をさせて頂き、私にも言葉では言い表せない、何か心に打つ物がありました。

また是非、ボランティアに参加させて頂きたいと思います。

▲目次へ

杉崎　穣滋

お疲れ様です。ボランティアに参加した杉崎です。

私が今回ボランティアに参加させていただいた理由は２つあります。感想と共に送らせていただきます。

1. 被災地の現状を実際に目で見たい

   一生に一度あるかないかの大惨事を目で見たいと思いました。実際に現地で、被災地に立つ赤い旗の説明を聞いたときに、とても悲しい思いになりました。自分が被災者の立場であったら・・・ということを考えると我が家を諦める、ということは胸が引き裂かれる思いであろうことが容易に想像できました。

2. ボランティアとして携わる人を見てみたい

   無償で被災地のために、という一心のみで動くことのできる人はどういった人なのか、気になりました。印象に残った言葉は、「ボランティアは競争じゃない」「頑張りすぎない」といった言葉です。私には、所謂大企業や一流企業で働く友人がいますが、彼らのマインドと、ボランティア精神というものは噛み合わないだろうな、と感じました。同時にボランティアでできることの限界も感じました。自衛隊撤退後の課題であると思いました。

今回貴重な経験をありがとうございました。

▲目次へ

安土　耕作

まず最初に、社会福祉協議会さんには、ボランティア活動の機会を作っていただきありがとうございます。

朝日さんには、ご迷惑をおかけ申し訳ありませんでした、帰ってきて後輩に叱られました、恥ずかしくて穴に入りたいです。

災害地は、建物の基礎だけ残って建物上部は跡形もなく見渡す限りガレキの状況を見て自然の恐さを痛感させられました、それから遠野まごころネットで多くのボランティアさんが参加されているのには驚きましたが、実際は人や道具等足りない物がたくさんある事に気づきました、個人だけでは、たいしたことはできませんが少しでも多くの人に話を伝え、ちりも積もれば山となると言う言葉を心に焼き付けて、三年、五年、十年とやれる事を考え少しでも長く継続支援させていただきたいと思います。

▲目次へ

高松　護

今回、僕がボランティアに参加した動機はボランティアをしたい気持ちより、自分の目で被災地をみてみたいと思ったからです。地震発生から約４ヶ月が過ぎ自分も含めまわりの人達も原発の問題を除いては東日本大震災について関心が少なくなってきていると思いました。なぜなら自分の生活にあまり関

わりがなく、テレビなどのメディアも発生時に比べあまり報道しなくなりました。原発の問題は自分の生活や健康にも深く関わっています。

今回、被災地を見てまだほとんど手付かずの状況だったことと僕が見たのはほんの一部ですが津波の被害の大きさに驚きました。町の家がほとんどなくなり、がれきの町になっていて、町がホントに復興することができるのか、出来てもどれだけ時間がかかるのだろうと思いました。そして復興するためには行政だけの力では難しく長期的にボランティアが必要だと思いました。

ほとんどの人が自分の事で手一杯だと思いますがひとりひとりが今回の地震のことを忘れずに、募金をしたり、ボランティアに参加したりすることが少しずつですが被災地の復興に近づくと思います。

▲目次へ

Gregory Meryers

遠野市へのボランティア活動を本当に楽しみました。被災地の必要とされているところへお手伝いができ、大変よかったです。この経験はこれからの私の人生の中にずっと残るでしょう。被災地の荒廃し、破壊されたすさまじい状態を自分の目で直接見たときは信じられない気持ちでした。しかしながら、残った現地の方々が手を取り合って前進している姿を見たとき、勇気付けられました。被災地を訪れ、現地の皆さんのお手伝いをすることを通して、本当の人間の精神の強さというものを直 接目のあたりにすることが出来ました。

もうひとつの大事なことは、調布市のすばらしいみなさんと出会えることができ、新しい人間関係、新しい友人ができたことです。今後、調布市が企画するボランティア活動に興味がある人に、是非お勧めしたいです。

▲目次へ

Adrian Subakti

7/17-20 の岩手県遠野市へのボランティア活動はよかったです。もし都合が合えば再度、ボランティア活動をしたいと思います。また、ボランティア活動の内容がもっと増えても（もっと厳しくても）かまいません。私たちのグループがまごごろネットのチェックポイントに一番最初に戻ってきたと思います。私たちは軽いボランティア活動を行うグループだったのでしょうか？

バスの中も空席がありましたので、東京から被災地へ寄付する物品なども運べたのではないかと思いました。

▲目次へ

三好　聡子

調布市社協さん、調布市さんのコーディネートのおかげで、スムーズに被災地ボランティアの活動することができました。ボランティアをしたくても、個人で行くのは少し不安・・という方にとっては、安心して参加できるよい機会だと思います。

また、ボランティア活動を通じて、様々な方々と出会えたことも貴重な体験となりました。岩手を往

復する旅は時間がかかりますが、ともにボランティア活動をする仲間同士、そして被災地で生活される方々も含め、皆さんが互いを気遣いあいながら被災地復興という同じ目的に向かって活動している姿が印象的でした。

一日も早い被災地復興の為に、ボランティア活動に参加される方々が途絶えることなく、今よりももっと増えていくことを願っています。

▲目次へ

大沼　静子

既に多くの方々が支援してくださっている中、少しでも何かできたらと参加しました。

当初スケジュール表に活動は９時から３時半までと書いてあり、内心自分にもできるのだろうかと不安も抱えながら、気負って現地に入ったのですが、到着した翌日には気温が下がり、また活動時間も実質１日２時間だったので、少々消化不良気味ではあります。

しかし、無理をしてけがや病気になればかえって迷惑になること、移動に時間がかかることなどから、やむを得ないと思います。見方を変えればボランティア受け入れシステムの素晴らしさを実感します。

試行錯誤を経てとは思いますが、＜朝礼や全体ミーティングを毎日行う＞　＜掲載された中から希望する活動内容に記名する＞　＜２～３０分おきに全員休憩を取る＞　＜送迎バスに乗ったら名前にチェックを入れる＞　＜一人分の寝床スペースがわかるよう床にテープを張る＞　＜冷蔵庫に入れる物には日付を書き２日後には処分する＞などなど工夫が満載でした。

また、避難所近くの活動場所であったため、少し手前で準備を整え、現地に行ったら静かに速やかに移動するなど、何より被災者への心配りが細やかでした。

各家のがれきはそのまま残っており、まだまだ復興までには長い年月がかかることを痛感しましたが、今回最も心を揺さぶられたのは、青々と茂った田んぼの稲と、波ひとつ立っていない穏やかな海でした。折しも、汚染されたわらを餌として食べた肉牛が、出荷停止となった時期だったので、丹精込めて育てた稲がそのようなことにならなければと願うばかりです。また、豊かな恵みをもたらしてきた海が一瞬にして牙をむき、その海を毎日目にする地元の方の心中はいかばかりかと思います。

また思いがけず、外国の方、異業種の方々、遠野市の方々などと交流ができたことは、出発前には予想もしなかった大きな副産物です。「インドネシアでも大きな津波があったが、何より宗教によるテロが怖い」「外国の方々はボランティアへの意識が高い」「休日はほとんど消防団の活動に充てている」などなど。

そして、何より聞いてみたかった遠野市の方の思い。「自分のところが被害を受けなかったからといって、平気ではいられない。昔から遠野市からは農産物を、大槌町・大船渡市・陸前高田など海沿いの町からは海産物をと、行き来があるのだから」と。市長だけでなく市民一人一人がこのように感じているからこそ、遠野まごころネットは成り立っているのだと納得しました。

最後に、今回のボランティア活動を企画してくださった調布市、遠野市、調布社協、そして衣食住に

至るまでお世話してくださった、朝日副センター長、多門さんに心から感謝申し上げます。

▲目次へ

ドゥマンジュ　恭子

～復興支援ボランティアに参加して近くなった東北～

連日報道で伝えられる被災地の様子を見て、私も現地に行って何かお手伝いできないかと方法を探としている時に、調布市社協主催でボランティアを派遣することを知り、「なんてタイムリー！」と参加させていただきました。そして、やはり自分の目で見て感じることの大切さを改めて知る貴重な機会になりました。

大学生、市内消防団の方や、企業から派遣された方、市職員など総勢 18 名の調布市社協チームが活動したのは大槌町を流れる小槌川でした。そこで、河川敷の草刈、川の中のがれきの撤去を行いました。

小槌川は毎年鮭が遡上することで有名で、この時もトンボが飛び交う穏やかな川でしたが、3 月 11 日のあの時には津波が遡り、付近の住宅の 1 階天井まで水が来たそうです。その時のすさまじい状況を物語るように川の中からは、瓦や家屋の建材、大きな金属のパーツ、衣類、家電品など様々なものが出てきました。川底から、また川のよどみの泥のなかからそれらを見つける度に、一瞬で平穏な生活を奪われた方々の無念の思いを感じざるを得ませんでした。8 月 11 日には今回清掃をした場所で精霊流しが行われるということです。その日には遺族の方たちの想いを込めた灯が水面に映り、尊い命を落とされた方たちの霊が慰められることを願いながら作業をしました。

作業の帰りに目の当たりにした壊滅的な沿岸部の光景からは、復興には長い時間を要することが実感を持って迫ってきました。遠野まごころネットのまとめ役の遠野市社協の佐藤会長も、これから仮設住宅への移行が進むと、孤立する人が増え、メンタル面でのサポートが必要になってくるとおっしゃっていました。今後も長期に渡っての様々なボランティア活動が期待されています。

宿泊先でお世話になった遠野の方たちの温かさに触れられたこともあって、今回の活動を通して、東北をより身近に感じるようになりました。また、全国から支援の想いを持ったたくさんの方々が集まってきている現地の様子を見て、まだまだ日本は大丈夫という思いを強くしました。関心を持ち続けること、そして自分にできる行動をこれからも考えていこうと思います。

今回一緒に活動をした皆さんと連帯感を持てたこともうれしい収穫でした。このボランティア派遣を企画してくださった調布市と、実現に向けて尽力してくださった社会福祉協議会に感謝します。

▲目次へ

第 2 期派遣　平成 23 年 09 月 21 日（水）～ 09 月 24 日（土）

作業内容
- 1 日目
  - 台風の影響で活動中止、被災地を視察
- 2 日目
  - 大槌町赤浜地区の山の斜面を流れる川沿いと、民宿の瓦礫撤去

参加人数　18 人（女性 9 名　男性 9 名）

引率者　産業振興課経済産業係 御前 憲明（調布市）
地域福祉推進課地域福祉係 寺沢 直樹（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第 1 期｜第 2 期｜第 3 期｜第 4 期｜第 5 期｜第 6 期｜第 7 期

参加者の感想（第 2 期）

宮本　祐貴

味スタでボランティアをさせていただいた際に今回の活動を知り参加を希望しました。

1 日目は台風の影響で活動中止になり、各被災地をバスでめぐりました。海岸付近は未だ作業が進んでいない所もあり、視界が海まで開けていて足元は家の基礎のみで鉄骨で半壊のビルの跡がぽつんとあるという様な景色がとても印象残っています。

2 日目はまごころネットの下で大槌に作業に行きました。大型漁船が打ちあげられた付近で家の基礎まわりのゴミ拾いや沢の中の網や木材、衣類の撤去を行いました。近くには船の他、大型冷蔵庫やプレハブ小屋が転がっており、まだまだ人の手が必要だと強く思いました。また、ケガをするようなポイントがものすごく多いこと、ついつい休まず作業を続けてしまうことが頻繁にあり、十分に自分自身で注意しなければならないと思いました。

今回の 4 日間で様々なことを見て感じることが出来たすごく濃く良い経験になりました。初めは不安でしたが、参加して本当に良かったと思います。

▲目次へ

田中　謙二

7 月初旬にピースボート主催の災害ボランティアに初めて参加し、石巻で側溝のドロ出し作業を行いました。

東京に戻ってからも「継続的な支援が長期間に渡って必要」と思っていました。ボランティア情報をいろいろ集めていたところ、偶然 twitter で調布社協のＨＰを見つけ、今回の参加となりました。
台風の影響で初日は活動が出来ず残念ではありましたが、初めて訪れた大槌町で多少なりとも活動ができうれしく思いました。活動前の現場責任者の言葉が印象的でした。「活動自体はムダかもしれない。でも瓦礫がなくなれば被災者の心が少しでも安らぐ。ならば活動の意味がある」

震災から半年が経ち、被災地の報道が少なくなる中、参加した一人としてあらゆる機会を通じて、今

回見たこと、感じたことを伝えたいと思います。機会があればボランティアに参加したい人と思う方は多いと思います。しかし、ボランティアバスなど、市民の受け入れがまだ不足と感じます。今回のように、社会福祉協議会、自治体、支援企業の協力のもと、災害支援の輪がさらに広がって行くことを希望します。そのためには、市民参加型の実績のある自治体、社会福祉協議会が情報を集め、共有し、周辺自治体にも広く働きかけ、市民参加の輪を広げていく努力が一層必要と感じました。

最後に、今回、お世話いただきました社協の寺沢さん、市役所の御前さん、お世話になりました。機会を作ってまた参加したいと思います。ありがとうございました。

▲目次へ

栗田　陽子

転職のタイミングで震災復興支援のボランティアを探していた時に、調布市でボランティアを募集していることを知り、この機会にと参加させていただきました。マスコミでの報道だけではわからない被災地の現実というものを見たかったからです。

今回は台風の影響で、残念ながら１日しか作業ができなかったのですが、それでも現地の様子を少しでも伺い知ることができる貴重な経験となりました。

車窓から見る町並みは土台しかない家やたくさんの瓦礫、陸に乗り上げた船など、まだ震災当時のままの場所もあり、とても言葉には言い表せないものでした。

作業は集落周辺の瓦礫撤去といったものでした。すでに震災から半年が経過していますが、周辺にはまだ津波で流されてきたであろうものがそのままになっているところもありました。家の跡地には生活用品が埋もれており、その時までここで平和な生活があったのかと思うと胸が締め付けられる思いでした。

今後も少しずつでもいいので何らかの形で継続的に被災地への支援を続けていきたいと思います。そして、見てきたことや感じたことを、多くの人たちに伝えていきたいと思います。また機会があれば遠野のまごころネットに行って、作業の続きをしたいです。

最後に、このような機会を与えてくださった各関係者の皆様、ありがとうございました。

▲目次へ

田中　あきら

今回、復興支援バスツアー第２期(9/21～24)に参加させて頂きました。移動日の２日を除き、台風15号の影響で、活動が出来たのは9/23(金)の一日のみとなってしまいましたが、9/22(木)にはバスで陸前高田、大船渡、釜石の様子も見る事ができ、貴重な体験をさせて頂きました。報道で聞いていた「復興が進んでいる」という状態が、あくま で以前と比較して瓦礫の整理が進んでいるだけに過ぎず、街の整備すらまだまだ時間がかかるという事が実感できました。

活動としては、大槌町赤浜地区の民宿で瓦礫撤去を行いました。震災から半年以上経過しているにも関わらず、１階部分の半分が片付きだし、やっと２階部分に着手するという段階でした。２階部分に足を

踏み入れると、天井からは衣類がぶら下がり、壊れた鉄骨がクモの巣のように張り巡らされ、非常口の案内版や家電が大量の泥にまみれたまま状態でした。鼻をつく悪臭も、テレビや新聞では感じ得ないものであり、現場に赴くことでわかる現実を思い知らされた感があります。後に聞いた話ですが、その民宿 は屋根に釜石の観光船「はまゆり」が乗り上げた建物でした。そのため、周囲の建物に比べて整理が遅れていたようです。

活動を通じ、短期のボランティアが果たして現地の役に立つのかと疑問を感じていましたが、一人ひとりは微力ながら、短期ボランティアの人間が入れ替わり立ち替わり支援に訪れることで、大きな力となる点を学びました。

また、「被災地」や「被災者」という言葉で、十把一絡げにしてはいけない現実があることを学びました。今後は瓦礫撤去などの作業から、仮設住宅支援、就業支援などへニーズがシフトして行くことかと思いますが、岩手県の沿岸部はまだまだ短期ボランティアの活躍が期待されていることと思います。

最後となりますが、2 期以降のボランティア活動が実り多いものとなることをお祈りするとともに、復興支援バスツアーを企画運営して下さる調布市と調布社協の職員の皆さまと、協賛企業様に貴重な機会を頂いた旨、感謝申し上げます。

▲目次へ

田中　昌

支援拠点のある遠野から被災地である三陸までは、北上山地のうねる山道を越えて バスで 1 時間半の距離でした。

なぜ、支援拠点がそんな遠くにあるのか？

その答えは、緑美しい山道を下り、深い木立の向こうの視界が開けた瞬間にわかりました。遠く海から続く平地はすべて津波でさらわれ、地面は土台だけになった家の跡と、雑草で覆われていました。台風の豪雨が一面に水溜りとなって広がり、一見すると湿地帯のよう。可住エリアはすべて津波でさらわれ地盤は著しく沈下。再びの津波の恐れもあり、仮設住宅もわざわざ山を切り拓いて作るしかない状況で、安全な支援拠点が置けるのははるか山の向こうの遠野市なのでした。

陸前高田、大船渡、釜石、大槌と、広範囲に渡って被災状況を見て来ました。砂浜もなくなり防波堤も破壊され、海と陸の境目がまったくなくなった道路を、時に波しぶきを上げながらバスで行き来しました。走っても走っても、どこまでも津波の爪跡。元の街並みが全く想像できないほどの惨状は、しかし、甚大な震災被害のほんの一部分に過ぎないのです。

現地紙の岩手日報は、半年あまりを経てもいまだに全てが震災関連の記事でした。まだ 9 月というのに彼の地では、朝夜とストーブが必要になるほど冷え込みました。小さな仮設住宅は、土砂崩れで一方通行の道の先にある、陽の当たらない山腹に作られていました。大槌町赤浜には、ボランティアと復旧工事関係者を除いては、人影がありませんでした。いずこも「復興」の賑わいはなく、無惨な姿のまま静かに時間が止まっていました。

東京にいて、想像だけで支援を行おうとするのは限界があり、時にピントのズレた行動につながります。現地に足を運び、様々な気付きをもたらすキッカケを下さった、調布社協と市関係者の皆様にお礼を申し上げます。そして、不慣れな私たちを温かく受け入れて下さった遠野まごころネットの皆様、１３区長の菊池様ご夫妻。何よりも、同じ気持ちで集い、短い期間ながらも協力しあって過ごした第２班の皆様に、感謝。

私は東京に戻ってから、暖房器具の支援プロジェクトにささやかながら寄付をしました。これからもあの風景を忘れず、三陸に心を寄せ続けます。東京に帰ってからが、本当の支援活動の始まりだと思っています。

▲目次へ

奥野　里佳子

震災から半年経った被災地を回ってみて、作業している人がまばらだったことに驚きました。 道路や電気は整備され、流された様々なモノは集められ、町は少しずつキレイになってきていましたが、まだまだまだまだ人手は不足していると感じました。 ゆっくりと地道な作業を続けて行くことで、次のステップに繋がるのだとは思いますが、被害の大きさを実感しました。

人が生活しなくなると、植物が根を生やし、様々な生物が住み着き、作業が思いのほか進まないことがわかりました。台風の影響で作業日が１日しかなかったのですが、２日以上あると作業のコツが掴めて効率よく動けたと思います。

今回が人生初ボランティアでしたが、ボランティアに参加されている人達の意識が高く、いろいろと気付かされることが多かったです。１人が出来ることは少ないですが人数が集まれば出来ることや続けていくことの大切さを今更ながら思い知り、今後も何かしたいという気持ちが大きくなりました。 こういう機会を提供してくださった方々に感謝致します。本当にありがとうございました。

▲目次へ

瀬戸　恵

震災から半年、この活動に参加して、被災地の現状を目の当たりにしたという実感があります。民家裏の小川から、ナンバーのついた車のバンパー、大量の建材、標識、消化器、タイヤ、本、衣服、漁の道具などを撤去し、ほんの数時間でいくつもの大きなガレキの山ができました。

「大槌は３ヶ月前とほとんど変わっていない」という現地ボランティアの言葉には、まだまだこれからも継続的な支援が必要であることが表れています。拠点とした遠野市のボランティアセンターには約160 名が寝泊りしているということでしたが、すばらしくオーガナイズされており、年齢・性別を越えて多くの人が協力して支援活動をしている姿に感動しました。往路 15 時間、復路 10 時間で３泊４日、活動は台風の影響もあって実質１日と短く、被害の大きさに比すれば微力です。でも、行って・見て・活動してわかること・感じることがたくさんありました。

私にとってこのようなボランティア活動は初めての経験でしたが、思いを同じにする仲間との出会い

もあり、すばらしい時を過ごすことができました。

調布市社協では今後もいろいろな形で被災地に向け継続的な支援を行っていくとのことですので、機会があれば私もぜひまた参加したいと思っています。

▲目次へ

阿井　洋一

個人的には 3 回目の被災地入りとなったが、台風通過直後で 1 日しか活動できなかったのが残念だった。

活動場所となった大槌町の漁港では港の再建も始まり、元の生活を取り戻しつつある地元の方々から感謝の言葉を頂いたりと、ちょっとずつではあるが復興に向かって動き出していることを実感できた。

宿泊場所が一般の方とは別だったおかげで、他の参加者と交流する時間も沢山とれて、結束感がとても高かったと感じた。私は調布市在住ではないが参加させていただきありがとうございました。

被災地ではまだまだ細かくても息の長い支援活動が必要だと思います。また機会があれば参加したいと思います。

▲目次へ

三沢　浩

出発当日は台風 15 号のため、中止の連絡が来るものと思っていましたが、予定通り出発。延々15 時間かけてようやく遠野に到着した。

翌日は台風は過ぎ去ったが、地盤がぬかるんでいるためか支援活動は中止。陸前高田市や大船渡市などの被災地を見に行った。震災から半年が経過した今となっては、倒壊した建物の多くが解体撤去され、広大な平原が広がっていた。しかしその中にビルやマンション等、多層階の建物は撤去未了のまま残っていた。見るとそれらの多くは 3 階まで津波が到達しているようであった。また撤去されたがれきの山、車の山の巨大さに改めて津波の威力を思い知らされた。

３日目に入りようやく支援活動ができることとなった。我々の担当は大槌町の住宅跡地、及び山の斜面を流れる川沿いのがれき撤去である。今回の日程で最初で最後の支援活動であるため、皆気合を入れて業務に取り組んだ結果、担当地域内でのがれきの撤去はかなり進んだと思う。

しかし、午後 2 時半という早い時間で活動は終了。これには正直拍子抜けした。遠野から被災地まで往復 3 時間という事情を考慮しても、活動時間が短すぎる。遠野まごころネットには再考を求めたい。

最後になるが、私は今までボランティア活動には縁がなかったが、今回の震災では何かしなくてはいけないと思っていた。しかし、具体的に何をどのようにやったらいいかわからなかった。今回の調布市の支援活動は、私のような初心者でも気軽に参加できるよう企画されている。この企画を考えてくださった調布市と引率の御前さん、寺沢さん、また参加者の皆さんに感謝申し上げたい。

▲目次へ

Ｈ・Ｍ

ほんの少しでも何かお手伝いと思いボランティアに参加させていただきました。

リーダーの方から「がれきの片付けは何も役にたつことでは無いのかもしれません。が、がれきをなくすことが被災者の心を少し前向きしてさしあげる事ができます」と聞きました。

魚を捕る道具もがれきの中にたくさんありました。使えるものがあれば使っていただき、1 日も早く魚を捕れる状態に戻れることを願っております。

▲目次へ

木村　志保

まず、今回この様な機会を与えて頂いた、調布市社協や、理解をしてくれた職場や家族に心からの感謝を伝えたいと思います。

私にとって人生初めての本格的なボランティアで、参加するまでは私でつとまるのだろうかと心配でした。しかし、今は何故もっと今までも積極的に参加しなかったのだろうという気持ちと、遅ればせながら今回参加できて本当に良かったという気持ちで一杯です。

台風の影響もあり、活動できたのは 1 日。私自身が出来た事はほんのわずかか、ほとんど影響は無いものかもしれません。しかし、私が今回のボランティア活動を通じて得たものは本当に大きなものでした。

共に今回の活動に参加した人たちとの出会い、遠野宿泊先で毎朝お味そ汁や新鮮な野菜を差し入れてくださった方、ボランティアセンターで何日も何週間も活動を続けていらっしゃる方の言葉、道々にある現地の方が立てられた「ありがとう」の看板は、どれも胸を打ち、これからの私の人生の糧になるように思います。

実際の現場は、一見するとそこに以前人が生活を営んでいたという事を感じられない程閑散とし、とにかく自然の恐ろしさを強く強く感じるばかりでした。そして、瓦礫撤去の作業を始めると、今度はそこに確かに生活があったのだと、一つ一つのかけらに感じさせられました。車のバンパー、テレビ、ソファ、名前の入った結婚祝いのプレート、中学校の卒業アルバム。そういった物を手にした時の気持ちをずっと心に持ち続けて生きたいと思いました。やはり私が出来た事はわずかですが、今回感じた事を普段の生活でも周りに伝えていきたいです。

▲目次へ

尾関　葉子

『一日ボランティアの意味』

復興支援バスツアーに参加したいと思ったのは、被災地の外に住む自分に何かできることがあるのか、それを知りたくて自分の目で現地を見たいと思ったからです。

きっと多くの人が、被災地からは遠い、長期間は家をあけられない、具体的な技術がない、などとしり込みしているのではないでしょうか。私もまったく同じでした。震災から半年も経って、岩手県の避難所は既に総て閉鎖され、どんな短期ボランティアが必要なのか、東京にいてはまったくわからなかっ

たのです。

調布でのオリエンテーションで『瓦礫撤去作業があるので、フル装備でお願いします』と言われた時は正直言って、半年経ってもまだ瓦礫処理？という印象でした。それでも、狛江や新宿の専門店でゴーグルや安全靴と捜し歩き、用途によって違うからと、手袋も３種類備えました。

わたし達二期が参加したのは、大槌町赤浜地区の瓦礫撤去。「何もない」というのが第一印象でした。震災直後の報道などで見られた見渡す限りの瓦礫、家の壁、柱などは、きれいに分別されて、数箇所にまとめられており、瓦礫の山と対照的に、瓦礫撤去作業場所は、家が根こそぎ持っていかれた跡に残された土台のコンクリートだけでした。そこに残っている瓦礫やゴミを集めるのが仕事です。「何もない」と思っていたのは勘違いで、近くに行くと、家の土台にぶつかって溜まったのでしょうか、小さなガラスの破片、窓枠、そして海岸から流されてきたであろう漁具が山のように出てきました。

ここに住まわれていた方はどうなったのか、私たちに知る由もありません。ボランティアリーダーの方が、「（被災された方は）もうここに戻ってこられないかもしれない。でも、ここがゴミのままではなくてきれいになったときに、次に進もうと、被災された方が思ってくださるなら、今日の仕事は絶対意味があるのだと思います」とおっしゃっていた言葉に押されて作業をしました。

赤浜地区では、当時、まだご遺体が揚がることがあったそうです。実際、斜面の海側にある川（沢）には、流されてきたままの辞書や本、車のナンバープレートがついたままのバンパー、タイヤなどが放置されていました。

斜面の中腹には、斜めに倒れかけたプレハブ小屋があり、壁面に、赤のスプレーで×と○、小屋の中、周囲は確認済み。小屋の下は未、というような内容が書かれていました。

斜面の下から、草刈をして、細かな瓦礫を片付けながら、斜面の上に登っていくという作業を黙々としていました。

当日参加した人数は、連休中であったことから多く、60 人ほどでした。

一日だけのボランティアでしたが、「数は力だ」ということを実感した作業です。自分から見れば、たった一人が一日だけでは何も役に立たないと思えるのですが、大きな流れの中では、毎日何十人の人が、その場所をすこしずつきれいにしていく作業工程の中に存在できるのです。そして、その大きな流れを作っているのが真心ネットをはじめとするボランティアセンターのコーディネーションであり、

お昼休みに、皆が海が見える場所でお昼ご飯を食べようと歩いていくのを見ながら、歩いていく背に向かって、リーダーが、「海にあまり近づかないでね。」と忘れずに声をかける、最初に必ず、余震はまだ続いています。地震が来たら、人のことはいいから高台に逃げてください。とにかく自分だけ逃げてください、それを全員がやってください。そうすれば皆が大丈夫です。

トイレもそう

そうやって、全員のことに気を配り、仕事の采配をするボランティアリーダーがいる。そうやって大きな作業工程が組まれている中だから、一人で一日だけの参加でも力にしてもらえることができるのだ

と実感。

遠野まごころネットのサイトには、今日も、ボランティア募集の記事がでています。一日でも大丈夫。心配しないで、ぜひ皆さんも参加してください。

そして、できれば、一回だけでなく、また一緒に行きましょう。

▲目次へ

第３期派遣　平成 23 年 09 月 28 日（水）～ 10 月 01 日（土）

作業内容
- １日目
  - 陸前高田市気仙町上長部地区の畑での瓦礫拾い
- ２日目
  - 陸前高田市気仙町上長部地区の畑での瓦礫拾い、杉皮むき

参加人数　18 人（女性６名　男性 12 名）

引率者　下水道課施設管理係 野村 伸生（調布市）
調布市希望の家 渡辺 井作（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第１期｜第２期｜第３期｜第４期｜第５期｜第６期｜第７期

参加者の感想（第３期）

馬場　咲夫

調布社協募集の東日本震災復興ボランティア３期に応募し、９月 28 日(水)から 10 月１日(土)行ってきました。現地に行き体験したいと思っていましたので、調布市、調布社協の今回の企画には、感謝しています。

中２日間実働計６時間、作業は 150 人での畑、小さな瓦礫拾い。２日目、杉皮むき。現場は陸前高田市上長部地区、当時津波が海から川を約４ｋｍさかのぼり、家をなぎ倒し流れた漁船が少し前まで転がっていたそうです。まごころネットで当初から関わり、腐敗した冷凍サンマの片付けを済ませ、瓦礫撤去を続けています。移動途中の陸前高田市街は、造成前の更地の印象、その中につぶれ破れた車の山、瓦礫の山脈がそびえる。昔見た炭坑の荒れた景色に似ている。

もっとも感銘を受けたことは、ボランティアの基本を見せていただいたことです。その人にあった働きをする、疲れたら自分で休む、無理をせず頑張らない。結果を出さなくてもいい、ノルマは課さない、自己完結、けがをしない。出来る事をそれぞれが、出来る範囲でする、してやるのでなくさせて頂く、現状を周りの人に知らせる、目から鱗の体験でした。私も今までにボランティアに参加し、企画し参加して頂いてきましたが、まごころネットの徹底には感銘を受けました。

２番目はやたらに楽しい。若い人も年配の人も障がい者も男も女も、ボランティアという目的でつながっている。金銭が入っていないから優しい、タダだからこそ、このようなことが出来ると言うことを、痛感しました。

色々な人と交流が出来たことも、仕事でないから出来たことです。次回はまごころネットの体育館に泊まりたい。また参加して、もう少し活動したい、不思議な充実感に浸っています。

▲目次へ

久武　哲也

まずはじめに、このような機会を与えてくださり、出資していただいた方々をはじめ、調布市社会福祉協議会の方々、受け入れていただいた被災地の方々へ深く感謝いたします。

まだ肌寒い３月１１日の日没前に、私も大きな揺れを経験いたしました。当時、諸用のため路上にて信号待ちをしていた私は、直感でこれは大変な事になったと慌てて自宅に戻り、自宅の被害も多少ありましたが、テレビを見て驚愕の思いで、その成り行きを見守っていたのを半年経た今でもよく覚えております。

あれから、数ヶ月間。復興作業に何らかの形で参加したいと思っておりましたが、なかなか実現できませんでした。心と行動が伴わずに時が過ぎ、自分の事に追われる毎日が、いつしか過去のものとして封印してしまう。阪神淡路大震災のときがそうでした。

今回、参加させていただいた動機は、阪神淡路大震災で封印されてしまったことを、再び繰り返したくない。私においては、そんな自己満足のためのボランティア参加でありました。

動機はさておき、遠野市の災害ボランティアセンターは需要と供給をとりまとめ、実に効率よく機能しており、多くの参加者が何か自分にできる事を求めて集まる頼もしい場という印象でした。３泊４日の日程のなか、活動に参加させていただいたのは２日間という短い期間ですが、その内容は陸前高田で津波の被害にあった田畑を再生させるというものでした。

まず被災地（活動場所）までの移動手段としての、現地の路線バスだったのか引退したバスなのかは不明ですが、懐かしさの漂うバスに多くのボランティア参加者が乗り出発を待っていると、定年を過ぎたであろう年配の運転手の方が、くたびれた感じの帽子をさっと頭にのせ、では皆さんお揃いですか？と爽やかな笑顔でこちらに挨拶し、見事に運転している様がとても素敵で、定年は仕事ができなくなったからではなく次の世代へ引導を渡すためにあるのだと感じたりしておりました。

そしてバスのなかから津波による被害を目の当たりにしたとき、かつて経験した事もないような衝撃に思わず息をのみました。グチャグチャになってしまった自動車の塊が、畑のなかにまるでそこに捨てられていたかのように沢山あるかと思えば、未だ見つからない行方不明の方を捜索している警察官の姿、全ての窓ガラスが失われ、口を開けた鉄筋コンクリートの建物らしき姿が、ポツンポツンと取り残されているだけで、見えるものは全て瓦礫の上にある山と海の風景。テレビなどで知っているはずの光景なのにバスが進むにつれ、心の底に眠る何かが熱くなっていくのと同時に、悔しい思いで一杯になりました。

作業は、地面を少し掘り起こしては大きな石やガラスの破片など畑にあってはならないものを取り除く作業で、一つ一つ見つけては手で拾い、かごに入れて取り出すという単純かつ非効率極まりないもの

でしたが、少しでも効率的にするために皆で知恵を出し合い、何としてでも畑の一つくらいは再生させたい、そんな思いで２日間作業させていただきました。

残念ながら目標を達成させることはできませんでしたが、そういった作業を共にした方々とは、いつしか家族のようになっていました。正直なところ、悔しい思いが残る４日間でありましたが、今回参加させていただき、言葉や映像では伝えられない多くを学ばせていただきました。少しでも多くの方に、ここで起きた現実を知ってほしいとも思うようにもなりました。

このような機会を与えていただき、感謝するとともに、少しでも早く被災された方々が以前の生活を取り戻せるよう切に願っております。

▲目次へ

久武　佐代子

身近なところでのボランティア活動や募金の経験はありますが、自ら行動に移すといったことがなく今回の東日本大震災が初めてのボランティア経験でした。といっても、震災から半年以上経ってからの行動なので、自分の行動力の無さを痛感いたしますが初めの１歩が踏み出せたように感じています。

テレビで何度も見入った映像を実際に目の当たりにして、現状は圧倒的な現実を突きつけてきました。そこで普通に生活をされていた人々やそこにあった風景・匂いを一瞬にして変えてしまったんだと思うと恐ろしくなりましたが、そこで立ち止まってはいけないという気持ちも湧き上がってまいりました。黙々と復興に立ち向かっていく住民の方々、それに寄り添うボランティアの方々、それぞれの思い・行動を感じることができ自分一人では何もできないけれどお互い協力しあうことで少しずつでも普通の生活を取り戻していってほしいと願っています。

復興には長い道のりですが、今後ともそれに寄り添いながら自分のできる範囲でのお手伝いを続けていきたいと思っています。

今回は、貴重な経験をさせていただいてありがとうございました。

▲目次へ

岩﨑　康治

調布市社会福祉協議会が派遣したボランティア活動に参加して感じたことがいくつかあります。

- ９月 21 日から毎週水曜日出発のボランティアバスを計６回実施していることは他の市町村では見られない活動であること。
  - 現地でボランティア活動をしている地元の人や長期で頑張っている人と言葉を交わしたところ、「夏休みが終わり、参加者がずいぶん減ってきた。週末や連休には少し増えるが、平日は個人参加も少ないので企業や組織が団体で参加してくれることは大変ありがたい」と調布市の活動を評価してくれた。また「作業内容も、重機による大型ガレキの撤去は一応済ませ、これからは人の手を借りた作業が主となり、人海戦術を取り入れていくことになる。側溝のドブさらい、公共地・私有地の整地作業など重機では処理できない作業なのでまとまった人

数の参加があれば作業計画も立てやすくなる」とのこと。

- 作業場所となった気仙町上長部は、津波の被害を免れた民家が山裾に数軒あり、他はすべて流されたとのことで、山裾の一部が元通りの状態に戻すべく、手を入れられている。ここは、さんまの冷凍工場があったところで、一時はさんまとハエの山となり、異臭がひどい所であったが、さんまをすべて地中に埋めてしまったとのことである。作業中も異臭を感じることがあった。ひと山越した中心市街地であったところは、ガレキ（廃材）の山がいくつもあり、津波で流された自動車が山のように積まれた場所がいくつも見ることができ、海水がひかず、池のような水たまりが一面に広がり、復旧作業が進んでいないということが一目瞭然である。
- 今回の社協の企画したボランティア派遣は、人数は多くはないものの、継続して行うところに意義があり、現地のニーズにこたえた活動ということが言え評価される。財力があれば、さらに喜ばれることになる。災害時における遠隔地域との連携の必要性が問われていくことになるのではという気がする。寒くなるが、11 月以降も引き続き派遣計画を検討してみてはどうかと思う。

- 宿泊施設とお弁当について
  - 一軒の民家を貸し切っての宿泊施設（遠野町十三区自治会館・下早瀬コミュニティー消防センター）ということで、ガス・水道・トイレ・電子レンジ・冷蔵庫が完備され、遠野市総合福祉センター内に用意されたボランティア宿泊所に寝泊まりする参加者と比べると恵まれていた。また、区長さん夫妻（施設の管理人？責任者？）が大変親切な方で、朝夕の食事時には、味噌汁まで作っていただいて感謝感激。加えて　昼食・夕食のお弁当も中身のある食べ応えのある内容でおいしくいただくことができた。
- 遠野市の災害ボランティアセンターの機能と運営について
  - 【機能】大きな被害にあった山田町・大槌町・南三陸町・釜石市・陸前高田市などでは社協の独自の機能が働かず、自力で災害ボランティアセンターを立ち上げるだけのスタッフ・モノ（道具）がそろわず、かろうじて派出所的なスペースを確保しての活動となる。ボランティア参加者の受け入れ施設（宿泊施設）が用意できない状態の中で、遠野市社協が中核となって活動していることに敬意を表すとともに大いに参考になった。被災地と遠野の本部が連携し、被災地で困っていること・必要とするもの・してほしいことなどについて随時連絡を取り合い、遅れることなく供給する、対応するという仕組みは、災害時だけでなく大がかりなイベントのような時の態勢の在り方として大変役に立つものと思われる。
  - 【運営】遠野市総合福祉センター内に設けられた災害ボランティアセンターは、市あるいは社協の職員が主となり、全国各地からきた社協、あるいは長期にわたってのボランティアの方々が、中軸スタッフとなって、運営をされているようだ。被災地との連携や被災者のニーズを的確につかみ、200 名以上の活動家たちを大槌町・陸前高田市・釜石市の各地に送り込

むというマネジメント業務に責任を持って遂行している。活動家たちに対しては、業務の説明から作業内容の指揮・指導をし、頼りになる存在である。地元の方々にとっても頼りにされていることでしょう。個々の参加者たちもオリエンテーションで説明を受けた諸注意を守り、統制のとれた行動をとっているのを見て心強く感じる。見ず知らずの仲間が互いに声を掛け合い、助け合いながら作業をすすめ、各人が自分に出来ることはこれなんだと納得しながら手足を動かしていたのではと思われる。

- まとめ
  - 事故もなく、怪我もなく、落後者もなくスケジュールを無事消化できたことは喜ばしいことです。マイクロバスで現地の宿泊所までの送迎、宿泊所からセンターまでの送迎と企業ボランティア並みの処遇であり、参加希望者がもっといてもいいような気がするが、送迎用の車両や宿泊施設のキャパシティーを勘案するとおさまりのいいところかなという気がする

▲目次へ

浅井　信也

実活動前の説明会にて、「ボランティアをさせていただく」という意識を忘れずにという指導がありましたが、別団体を通じて行った石巻の活動時の被災者との接し方指導と違い、立場はあくまでも対等であり細心の配慮を持って責任ある行動を取るという促し方でいいのではないかと、疑問を持ちながら活動に臨みました。

実活動に入り、陸前高田チームの某企業団体と同様の作業を行いましたが、どうやら会社からの強制参加のようで、自ら手を挙げて参加している団体・個人との意識の違いを大きく感じました。その中でも 99%の方々は問題なく活動を行い、人海戦術が重要な今、貴重な戦力になっていると思いますが、本当に極わずかな心ない人の行動で全てが台無しになるという苦い経験からくる対応が「させていただく」という言葉に表れているのだということがわかりました。

しかし、この事実は日本全国における東日本大震災への現意識を顕著に表わすものでもあり、とても勉強になりました。

そして今後、現地に行かなくてもできる大きな枠での支援、うまくいっているとはとても思えない行政への監視・指摘などの地道な行動が、実際の支援活動同様に重要だと感じます。

また、今回集まった 19 名のメンバーですが、世代もバラバラで色々な話ができとても楽しく活動ができました。今後も何かで交流することが、被災地を忘れずに長期的な支援を行う原動力となり、初心を思い出させてくれるものと考えています。このような機会を与えてくれた方々に感謝します。ありがとうございました。

▲目次へ

熊木　千恵

まずこの度の復興支援ボランティアを企画主催して頂いた調布市社会福祉協議会の皆様、資金協力を

された企業・個人の皆様にお礼申し上げます。

3/11 の未曽有の大震災で私の卒業した母校もみんな避難所となり、見知った土地が無残な有様になっている様子を呆然と TV で見ていた春。やっと現地でお手伝いが出来たのは今回のボランティアで、季節は秋になっていました。片道約 9 時間かけて岩手県遠野市へ。長時間の移動でしたが、都度休憩があったので思ったほど疲れませんでした。

実質活動日数は 2 日間。活動初日は天気に恵まれ絶好のボランティア日和で、2 日目は途中雨にふられ中止が危ぶまれましたが、お天気の神様が味方をしてくれたのか、終日作業を続けることが出来ました。2 日間の活動場所は陸前高田市気仙町上長部地区で住居跡地の瓦礫拾いと畑に堆積した石ころ等の除去作業でした。

作業前の全体朝礼で言われた－ボランティアは競争じゃない。被災地は観光地ではない。ボランティアは「させていただくもの」という感謝の念をなど心構えを諭して頂き、現地での自身の言動に責任を持たなければと思いました。普段何気なくやってしまうことをどれだけあたり前にやらないか。相手の立場に立って、想像力をもって人と接する・行動することが特に現地では求められると感じました。

実際、現地入りして津波被害を受けた地域を目の当たりにし身震いしたのを今でも覚えています。倒壊した家屋のほとんどは片付けられ、まるで埋立地のような更地になっていましたが、集められた大きな瓦礫の山・メチャクチャに破損した大量の車・津波の塩害で色の変わった杉の数々、爆弾でも投げ入れられたような破壊した 3 階建てのマンションに病院、折れ曲がったガードレールに倒された電柱－今自分のいる場所が想像を超える高さの水に攻めこまれたと思うとゾッとし、自然の力に圧倒される自分がいました。私たちの作業現場は津波最高到達点 6km のエリアで、住宅跡地での瓦礫拾いでは、ガラスや瓦の破片の他に泥まみれのプレイステーションや食器などが出てきました。また側を流れる用水路には、お茶碗や湯のみが転がっており、家屋自体は壊され姿は無くともここで確かに普段の生活が営まれていたこと、その生活が一瞬にして壊されたことを肌で感じ何ともいえない気分になりました。畑の石ころ等の除去作業では、過去数回、石除去作業が行われたものの、耕すとまだ津波が運んだ石が出てくるとのこと。本当に 1 日 100 名近い人数で石を拾っても、まだ石が残っているような状況でした。作業の際、自然と私たち社協のメンバーでアイデアが出て、無数の石を手作業で拾う以外に、支給されたカゴに土を入れて振るいにかけるように石を除去していったりと皆で一致団結した作業ができたと思います。

それでも、実質 2 日間と短い期間でしたが、自分がボランティアとして出来たことは、本当に小さく焼け石に水のように思えることもありました。地元のバスの運転手の方が仰っていた「今は重機も入り、倒壊した建造物の除去は進んでいる。しかし仮設住宅に入られた方は篭ってしまっている人も多く、今は人と交流する機会が必要になっている。」と現地の実情を伺うことも出来ました。まごころネットでは畑を将来麦畑にして、仮説住宅に住んでいらっしゃる方々や地元の方々がもう一度畑仕事が出来るように交流の場とすることが目標とのことでした。「フィジカル」から「メンタル」へ移行しつつあるのでし

ょう。メンタル面を鼓舞し、支えるには今後も人の手が必要になってくると思います。確かに出来たことは本当にささやかな事でしたが、自分の出来ることをやれる範囲で続けていきたいと思います。

今回のボランティアでは、第３期メンバーをはじめ自治会館の館長ご夫婦や遠野の地元の方など本当に素敵な方々とお会いすることができました。特に３期のメンバーのみなさん、作業は真剣、でもバス移動中、入浴時、公民館で過ごした時間、年齢も性別もバックグラウンドも様々なのに感じた一体感。まるで修学旅行のように和気あいあいと過ごせて、初めて会った方達とは思えない親近感がありました。

今回のボランティアで貴重な体験と素敵な時間をいただくことができました。本当にありがとうございました。

▲目次へ

三好　かやの

９月 28 日～10 月１日の第３期の活動に参加しました。

ふだんは個人で仕事をしているので、他のみなさんとうまくやっていけるか心配だったりしましたが、年齢も仕事も経験も違うのに、だんだん一体化できた感じがして不思議でした。

この活動に参加しようと思ったのは、私自身が東北出身で、友人知人が多いことと、作業の中に「畑の清掃」という項目があったからです。いつも仕事や取材で農家の方にお世話になっているので、できれば生産者の方のお役に立ちたいと思いました。行ってみなければ何ができるかわからないのは承知していましたが、実際陸前高田市の上長部地区で、２日間ガレキや石の撤去のお手伝いができて、ありがたかったです。

ただ、現場は次から次へと石が出てきて、まだ畑戻るには人手と時間がかかると思いました。海から６キロ離れた場所まで石や冷凍サンマを、一気に運んでしまう津波のおそろしさも、身をもって知りました。ずっと支え続けている遠野のまごころネットのみなさん、朝の所長さんのお話には、身が引き締まりました。自治会館の菊池区長さんの味噌汁、本当にありがたかったです。東京からボランティアが支援に行けるのは、中継地点で頑張っている地元のみなさんのおかげなのだと実感しました。

本当に行きと帰りに時間がかかるわりには、できることはささやかで、地元の方に申し訳ない。ただ仕事を休んで参加するには、４日間が精一杯だったりもします。できれば、興味本位ではなく、被災された方のお話をちゃんとききたかったです。「まごころネット」の掲示板で、被災地の方にお茶を出しながら話し相手になる「カフェ隊」という活動があると知った時は「こっちに行ってみたい」と思いました。

３日目のお風呂の帰りに、駐車場で偶然釜石で被災して遠野の仮設住宅で暮らしているご夫婦に会いました。自宅を津波が襲ったけど、ボランティアがドロ出ししてくれた。今も感謝していると。私たちがやったわけではないのに、私たちがボランティアだと知ると、奥さんは涙を流しながら「ありがとう」と。もっともっと話を聞いてさしあげたい気がしました。

陸前高田に向かうバスの中で、何もかも流された街を見ました。代わりに建っていたのは、プレハブ

でできた市役所、コンビニ、お弁当さん、クリーニング屋さん……。これから冬が来るのに、にわか仕立ての建物ばかりで大丈夫なのかと思いました。神戸の震災の時、仮設に入った知人の話では、神戸でも冬は水道が凍ったそうです。

避難所と違い、仮設に入った被害者の方々の状況を把握するのは難しいと思いますが、寒さが厳しくなれば、作業は困難になるし、これから必要な物資も増えてくるはずです。機会があればまた現地へ行きたいですが、冬場を乗り切る物資の支援等、できることがあればお手伝いしたいと思いました。

ずっと何かがしたいと思っていましたが、１人では難しくずっと足踏みしていました。今回本当に微力でしたが、現地に行かせていただき、被災地を目の当たりにすることができ、感謝しております。調布にいると仕事と家事に追われてばかりで、震災があったことも、まだ放射能が降り続いていることも、忘れてしまいそうになりますが、できるならまた現地でお手伝いをしたいですし、福島の人たちのお力になれる活動があれば、ぜひ参加したいと思います。また、参加者が集まれる機会を作っていただきたいです。直接現地に行かなくても、遠野のみなさんと連携して、被災地を支援し続けるためには、何ができるか考えたいです。

いろいろありがとうございました。

▲目次へ

島田　文彦

大震災から半年以上がたち、メディアや被災地以外の場所では、「被災地の家屋の瓦礫や片付けはかなり進んでいて、8 割以上が終了し、復興に向かっている」ということをたびたび聞いていました。実際に今回、遠野市、また作業場所であった陸前高田に行くと、確かに海岸部のおおかたの家屋の瓦礫はまとめられ、整理されていました。

しかし、それはただ、「片付けられている」というだけであり、「復興」という 2 文字とは結びつかないものでした。

参加する以前は、私は被災地のボランティア≒家屋の片付けという印象を少なからず抱いていました。ただ、現地で実際に行ったことは「畑の再生」。畑に流れ着いた瓦礫やゴミ、そして多くの石拾い。イメージしていた作業と異なり最初は戸惑いましたが、作業するにつれて、こういった作業こそが「復興」への第 2 歩目なのだと感じました。

片付け、整理することが第 1 歩。

そして地域住民の方々が震災前と同じように、そこで働き、作物を作り普通に暮らす事ができて始めて「復興」と呼べるのではないかと思います。

そうした考えのもと、私がボランティアをさせていただいて感じたことは、今回の私たちの小さな一歩、人の手でしかできないごくわずかな一歩づつが将来の「復興」のために必要不可欠なことだということです。また、それに関して、私たち若い世代も中心となってコンスタントかつ長期的にこの小さな一歩のお手伝いをさせていただく事が重要なのだと感じました。

最後に、参加させていただいて、地域住民の方、現地のボランティアセンターの方、今回のボランティアメンバーの方々等のお話も自分にとって大変貴重なものとなり、改めて参加してよかったと感じています。ありがとうございました。

▲目次へ

谷戸　一郎

陸前高田市外、杉林に囲まれた現場に着いた。見た目はかなり片付いているようだが、田んぼ畑には石等が埋まっていて撤去するのが活動だった。

団体行動ではリーダーの指示に従ってする、時間どおりに進行させる、活動時間が短い、体力を気遣ってのことと思う。

4 日間、18 人の仲間と行動できたことは、皆家族。奉仕活動させて頂いたことに感謝致します。ありがとうございました。

- 私の思い

  自分で、個人の田畑片付けをしたい。車に生活に使うものすべてを持参し、現場近くで車を停めさせて頂き、1 日中奉仕活動する覚悟があります。ご配慮下さればありがたく、私の思いが叶いますようお願い申し上げます。

▲目次へ

第 4 期派遣　平成 23 年 10 月 05 日（水）～ 10 月 08 日（土）

作業内容
- 1 日目
  - 大槌町の瓦礫拾い
- 2 日目
  - 陸前高田市の畑の石拾い

参加人数　15 人（女性 4 名　男性 11 名）

引率者　障害福祉課相談係 佐藤 康行（調布市）
ちょうふ地域福祉権利擁護センター星 賢治（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第 1 期｜第 2 期｜第 3 期｜第 4 期｜第 5 期｜第 6 期｜第 7 期

参加者の感想（第 4 期）

佐々木　正雄

正直なところ「やりがい感」がより強く感ぜられたのは畑の小石拾い出しよりも住宅地からのがれき・廃棄物の撤去の方でした。しかし、当日の作業の割り振りは現地の天候、作業現場の状況に十分配慮し、まずは作業者の安全第一で毎日の作業現場が割り振りされておりました。たった 2 日間しか無い作業をこのような異なった地区と内容とに割り振っていただき大変ありがたかったです。

また機会がありましたらぜひとも東北災害支援ボランテア活動に参加させてもらいます。

▲目次へ

畠山　幹男

今回、初めて被災地の支援ボランティア活動に参加して、自分自身にとって貴重な体験をすることができました。震災が生してから、地域の活動の中で募金活動を企画するなど、してきましたが、被災地域に足を運び、被害の甚大さ、復興への道のりの困難さなど、多少でも体感することで、今後自分が何をしたら良いのか考えるベースになるのではと感じました。

また、現地でボランティア活動を続けている方と話をする機会があり、ガレキの処理や、畑の石拾いや、川の清掃作業などの、作業面の支援のほかに、被災者のコミュニティ作りや精神面のサポートなどで苦労されている様子が分かりました。被災者の方は、今まで住んでいた、地域コミュニティアから、仮設住宅に移り住んでいるのですが、お互いに知らない人同士が、あらたなコミュニティアをつくり、生活が楽しく、生きがいとか希望をもって、復興へ向かうことが、今後の大きな課題だと感じました。

特に、高齢の方は、仮設住宅で、なにを生きがいとしたら良いのか、そのために、ボランティアセンターには、仮設住宅を訪問して、住民同士のコミュニケーション支援の活動する「カフェ隊」が始まっていました。この活動は、始まったばかりで、まず少しでも多くの住民が、「お茶会」に参加してもらうことで苦労されています。まだ数人しか集まらないこともあるということです。また仮設住宅は、色々なところに、分散しており、遠野から仮設住宅に移動するのにも、一時間半くらいかかるので、一日に一箇所しか訪問できません。

この様に、復興への道のりは、厳しい状態であることを感じて、調布に戻ってきました。

復興を支援する活動は、今後とも持続して行うことが必要です。さらに、被災地の困難な状況を、より多くの人が知ることで、更に多く人がボランティアに参加することも必要です。そのために、私たちが、今回見てきた、被災地の状況をより多くの調布市民に知ってもらう活動を行いたいと思います。今回訪問できなかった、仮設住宅の人とコミュニケーションして、どのような支援が可能なのか、自分たちでできる事を探したいと思います。

私は、再び遠野に行って、「カフェ隊」の人と仮設住宅での、「歌をうたう」音楽ボンティアを予定しています。調布では、さまざまな地域ボランティアとして、住民のコミュニケーション活動に貢献している人が沢山がいます。そのようなノウハウが、被災地のコミュニケーション活動にも役立つのではないでしょうか。より多くの人が、さまざまな支援活動に参加することを期待します。

▲目次へ

鈴木　奈未

■作業１日目　大槌町にてガレキ拾い

震災から半年以上経過し、大槌町では大きなガレキはほぼ片付けられ、住宅の土台だけが残っている状態のところが多かったです。ただ、大槌町へ移動する間に通った釜石市では、多くの建物が、一階部分が歪んで使用できない状態のまま残っていました。まだまだ、復興までの道のりは長いのだなと感じられました。

私達がガレキ撤去をした場所は、山際の住宅があった場所で１mほど敷地レベルが高く、重機が入れ

ないため、人の手でガレキを下に落とすという作業でした。（下に落とせば重機で運べるので）雨が降っていたこともあり、作業は１時間半ほどで終了しましたが、約 30 名で作業したので、一気に片付けが終わりました。一人ひとりの力は小さいですが、大勢の力が集まるとホントに凄いなと実感しました。

「ガレキ」と一言で言っていますが、実際に一つ一つ手で拾っていると、それは「ガレキ」ではなく、まな板、フライパン、オリーブオイル、インスタントコーヒー、トレーナー、おもちゃのトラック、彩色された木（元は何か分からなかったけど）などなど、一つ一つがちゃんと「物」でした。道中で見た山のように積まれたガレキにはどれほどの生活が詰まってたのだろうと思うと胸が痛くなりました。また敷地の端のほうには、球根がたくさん埋まっていて、綺麗に庭を手入れしていたことが伺え、住んでいた方の顔が少し見えた気がしました。

■作業２日目　陸前高田市にて畑の石拾い

作業をした場所は木に囲まれており海は見えないのですが、川をさかのぼって津波が押し寄せたそうです。その為、津波が引いた後に、川の石が畑に残ってしまい、畑としてもう一度使えるように小石を拾う作業をしました。近くに仮設住宅があり、来年には仮設住宅の方と一緒に小麦を植えたいそうです。

前日のガレキ撤去と違って、拾っても拾っても石・石・石…。表面の石が無くなっても、少し掘ると、また石・石・石…。 先の見えない作業でした。ボランティアリーダーの方の話では、この作業はすでに６回目で、 表面がキレイになっても雨が降ると、また石が浮いてくるとのことです。よく、北海道やブラジルの開拓民が「畑を切り開いた」という話を聞きますが、畑を作るって本当に大変なんだなぁと思いました。ただ、この地域では「片付ける」という作業から、「生活をする」ための作業へと一歩進んだ作業のように思えました。片付けが終わっても、生活を取り戻すには、まだまだ時間が掛かるということを感じました。

■感激の組織力。遠野まごころネット（ボランティアセンター）

現地でお世話になった遠野まごころネットは、それ自体がボランティアの手で運営されており、作業の指示やどこへ何人派遣するかなど、長期で参加しているボランティアさんがリーダーとなり、仕切ってくれています。毎日新しく来るボランティアさんに諸注意や作業の指示などを的確に行い、取りまとめていく姿は、本当に凄いと思いました。知らないもの同士が集まって、半年前に０から生まれた組織とは思えない機能性というか、組織力には目を見張るものがありました。

■その他

今回、肉体労働系（それほどきつくは無いですが）の作業を行いましたが、ボランティアには避難所を回ってお茶を出すとか、ボランティアセンターでの PC データ入力など、様々な活動があります。また、ボランティアに参加されている方は、みなさん活動的な人が多く、その人生を聞くだけでも、とても興味深く、勉強になりました。行ってみたいけど、体力に自信がないなぁと躊躇している方がいたら是非、行ってみて欲しいと思います。私も是非また参加したいと思います。

■最後に

今回、調布市の復興支援ボランティアに参加し、本当に貴重な経験をすることができました。引率して下さった星様、佐藤様はもちろん、陰で協力していただいた大勢の方に感謝いたします。そして、今回一緒に参加した皆様のおかげで４日間楽しく元気に活動することができました。本当にありがとうございました。

▲目次へ

鈴木　博子

調布市さん・社会福祉協議会さん・協賛企業さんに，このような機会を設けていただき，たいへん感謝しております。どうもありがとうございました。

- 事前のオリエンテーションについて
  - 必要な持ち物や予防接種，心構えの他，第 1 期の方々の活動の様子も聞くことができて，たいへん参考になりました。
- ツアーについて
  - ボランティア初心者にとっては，個人ではなくこのようなツアーがあると，一歩を踏み出しやすくてよいと思いました。
  - 毎日お風呂に入れたこと，自治会館という快適な環境で眠れたことが，有り難かったです。疲れと緊張を解いて，リラックスすることができました。また，自治会長の菊池さんには毎朝味噌汁をご馳走になったりして，たいへんお世話になりました。感謝！
  - 引率の星さん・佐藤さんと楽しい仲間に恵まれ，非常に楽しい４日間を過ごすことができました。おかげで，辛いことや苦しいことがあるのかも？という不安は払拭されました。
- ボランティア活動について
  - 説明ではまごころネットさんの「無理しない」「頑張りすぎない」という言葉に勇気づけられ，現地では隊長さん達の配慮により，悪天候でも瓦礫拾いなどが苦痛ではありませんでした。
  - まだまだ現地では人手が足りないようでしたので，これからも支援を続けていきたいと思います。今後も，調布市でこのようなツアーを継続していただけるとよいと思いました。
  - 調布市のビブスのおかげ(？)で，色々な方との出会い・会話があり，よかったです。
- 現地で感じたこと
  - テレビや新聞で報道されていた街並みや瓦礫の山を見て，鳥肌が立ちました。住居跡での瓦礫拾いでは，薬・おもちゃ・食器といった家庭生活が感じられるものが多く見つかり，被害を受けた方々のことを思うと，何とも切なくなりました。
  - また，地震や津波による被害の大きさと胸の痛みは比例しないということも実感しました。わたしの地元では岩手県よりもはるかに被害は小さかったのですが，見慣れた・遊んだ場所が浸水し，船や瓦礫が打ち上げられた様子を見たときの方が，胸の痛みははるかに大きかったです。現地に住んでいる方々・その地域出身の方々の気持ちは，想像力をはたらかせて慮

って行動するしかないと思いました。

▲目次へ

古田　宣吉

今回支援活動に参加して、それをやり終えた時の達成感は私にとって久しぶりの感慨でした。ボランティア活動をやってみたいという思いは、前々から持っていましたが、機会がなく過ごしていました。が、そんな折、市報で支援活動募集の記事を見て「これだ」と思い応募しました。３泊４日の活動計画は私にとっては、まことにうってつけでした。家内も後押ししてくれました。

２日間という短い期間でしたが、１日目のガレキ処理、２日目の畑の石拾いと、少しでも我々の活動が役に立ったであろうことは、よろこびです。

そして何より 15 名のメンバーの方々が、私のような年寄りに何かと気を遣って下さったことには感謝しています。家に帰って家内にいろいろ話をしたら「また行ったら」と背中を押されています。私も今回で要領もわかったので体調さえよければまた参加してもよいかなと考えています。

２点だけ気が付いたことがあります。

１つは、運転手さんもメンバーの１人ですから、お互い名前で呼び合った方が更に一体感が生まれるのではないでしょうか。

２点目は、初日センターでのオリエンテーションで、どこか知らない人がまぎれ込んで来た時、みんなで一瞬笑ってしまったこと。私も笑いました。だが後でああ悪いことをしたなと反省しました。あの人もどこからか１人できて一生懸命だったでしょうに。でも世の中捨てたものでないと思いました。あれほど大勢の人達が全国から集まってボランティア活動をしていることには、ほんとうに心から敬服し感動しました。

最後に引率の星さん、佐藤さんに大変お世話になったことに深く感謝致します。有り難うございました。

▲目次へ

高見沢　ナオミ

「被災地ボランティアを経験して」

私が被災地で活動するのは２度目でした。

８月に同じく遠野まごころネットの活動に参加して、「人手が必要、人手が足りない」と感じたので、Yahoo!フロントページ掲載の「復興支援」のサイトにあった、調布市のボランティア募集に応募しました。

何もかも無くなってしまう、町が丸ごと無くなってしまう、という想像を絶する状況で、周りからできることは本当に小さなことでしかないかもしれません。

また１人１人の力は、本当に限られたものです。

　でも、被災地以外の場所に居る私達が手助けに行く事で少しでも役に立てるなら、そばに寄り添うことで少しでも気持ちが切り替えられるなら、形を変えながらいつまでも被災地に関わっていかなければ、と強く思っています。

　更に探してみると東京や地方など、自分の住んでいる場所でできる「写真の修復」等のサポートの形もあります。

　とにかくいつまでもずっと、被災地の方々に、「ここであなた方のことを覚えています。できることは少しずつやっていきます。」と発信し続け、関わっていきたいと思っています。

　お金もさることながら、人の手をいつまでも！

▲目次へ

第 5 期派遣　平成 23 年 10 月 12 日（水）～ 10 月 15 日（土）

作業内容
- 1 日目
  - 陸前高田市気仙町上長部の畑の石拾い、向日葵の種収穫
- 2 日目
  - 大槌町赤浜地区の宅地エリアでの瓦礫撤去

参加人数　17 人（女性 8 名　男性 9 名）

引率者　政策企画課 花岡 裕（調布市）
総務課総務係 本田 裕人（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第 1 期｜第 2 期｜第 3 期｜第 4 期｜第 5 期｜第 6 期｜第 7 期

参加者の感想（第 5 期）

関谷　公子

お疲れさまでした。 初めて調布市の第５期「復興支援ボランティア活動」に参加させて頂きました。何度か被災地を訪れ、被害の甚大さ、被災者の辛さ、復興の厳しさを実感しています。

遠野でのボランティア活動は初めてでした。ひまわりの種取り、支援物資配布の為の駐車場の確保、今回も自分が出来たことなんて、ほとんど無いようなものでしたが、みんなの力で少しでも前進出来たなら良かったと思っています。

引率担当の市役所の花岡さん、社協の本田さん、そして宿を提供して頂きました遠野町第１３区長野菊池さん、運転手の方、沢山の方々に支えてもらって無事に活動ができました。本当にありがとうございました。

そしてそれ以上に皆様を初めとした熱意あるボランティアの存在に大変勇気付けられました！

「袖振り合うも多生の縁」と申します。きっかけは様々だったでしょうが、一緒に活動したメンバーの方々が、問題意識を持ち、自分のできる事をやっていこうという志を持ち、行動している事に感動もしました。このご縁を今後も何らかの形で大事にしていけたら良いなあと思っています。

東北はこれから益々寒さが増します。現地の方が復興に向けて必死に頑張って暮らしていらっしゃる姿を見て、これからも自分は自分なりに、出来る事を探していけたらと思っています。調布市でぜひこれからも復興支援ボランティア活動を継続して頂きたいと思います。調布市で何かボランティア計画が有りましたら知らせ頂ければ幸いです。

▲目次へ

吉田　浩之

この度第五期にて被災地支援ボランティアに参加させていただきました。本田様、花岡様のご依頼により支援活動の感想を本メールにて提示させていただきます。

所感としまして、上記お二人と八田様（調布市）のコーディネートが非常によく、不満事項は一切ご

ざいません。

宿、お風呂、食事（お弁当）などのライフラインが非常に充実していたことが大きな要因になっていたかと存じます。夜は夜でお酒はご法度と思いこんで参加したにも関わらず、適量呑ませていただいたことや、朝は朝で、区長様のおいしい味噌汁のおもてなしも嬉しい誤算でした。

不満ではないのですが、作業自体がそんなに負荷のかからないもので、思っていた 内容よりも軽度な作業に終始したことです。

ただ、「物足りないくらいがちょうどいい」とまごころネットの方が仰っていたことが理解出来た瞬間でした。個人的には２日間の作業なのでもっとできた、という思いもございますが…。

最後に、本田様、花岡様、八田様にくれぐれもよろしくお伝えくださいませ。雰囲気作り、時間通りのスケジュール、リーダーシップ、この３名がいらっしゃら なくては違う感想になっていたかもしれません。この度はこのような機会を設けていただきありがとうございました。引き続き出来る範囲で自分なりの復興支援を細くとも長く続けてまいりたいと思います。

▲目次へ

八田　主税

この度は，仲間に無理やり入らせていただきまして、心より御礼いたします。７月に御一緒させていただき，岩手・宮城・福島の視察時点から時を経て，さらに必要な支援が山積していることを今回の参加で改めて感じて帰ってきました。

調布市社会福祉協議会に担っていただいている復興支援のボランティアにつきましては，岩手県遠野市のまごころネットの活動状況から見ると，神奈川県に次ぐ内容であり，高く評価できるところです。

今回の本田君も役割をしっかりこなして，ボランティア参加メンバーも一同に関心していました。重ねて御礼いたします。日を改めて，反省会でもできれば…と考えますが，取り急ぎ，本田君からいただいた宿題である感想文を別添ファイルのとおり送信いたします。

なお，２ページ目の後段にて，第６期以降に向けて検討事項を２点記載しましたので御参考にいただければ幸いです。

第５期復興支援ボランティア（10/12～15）の活動内容等につきまして，今後の参考として，被災地の現状や遠野まごころネットのボランティアからのメッセージなどを報告いたします。

- 第５期の概要

調布市社協 本田さん・政策企画 花岡さんが今回のコーディネート役となり，企業ボランティア４人・一般参加のボランティア１１人（市民のほか，埼玉県などからの参加あり･最年長：70 代男性・最年少：大学３年生女性）の合計１７人のチームでした。

10/12・15 の前後両日は，調布市～岩手県遠野市の 10 時間の中型バスでの移動日程，実質的なボランティア活動内容は，10/13・14 の２日間でした。

- 初日（10/12）天候：晴れ

午前８時 調布発⇒午後４時過ぎ 岩手県遠野市着

遠野まごころネット（被災地後方支援拠点）のオリエンテーション

- ２日目（10/13）天候：晴れ〔朝：9℃〕

  午前５時半 起床⇒遠野まごころネット⇒陸前高田市

  陸前高田市上長部(カミオサベ)の畑でのガレキ撤去･塩害対策としての向日葵の種収穫の２班に分かれて活動

  ※第３期で参加した政策企画２人のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動と同地･サンマ加工場から流出した魚の腐敗臭がまだ残る状況

- ３日目（10/14）天候：晴れ〔朝：5℃〕

  午前５時半 起床⇒遠野まごころネット⇒大槌町

  大槌町（赤浜地区）の被災宅地エリアのガレキ撤去

  ※民宿屋上に青色の遊覧船が打ち揚げられていた地区・ひょうたん島のモデルの島が一望できるエリア

- 最終日（10/15）天候：雨〔朝：8℃〕

  午前８時過ぎ 岩手県遠野市発⇒午後５時半過ぎ 調布着

- 現地の状況等の感想
  - ７月時点で視察した被災地の状況と比較して，ガレキ等の撤去は進み，被災施設や住宅の跡地が更地化されたが陸前高田市の畑でのガレキ撤去ではハンドボール程度の石やガラス等が多く流れ込んでおり，また大槌町の作業ではガラスや釘などの撤去のほか，位牌が見つかるなど，マンパワーによるきめ細やかな被災地支援活動が必要であると感じました。
  - 一方，海沿いの地域から高台の地域に仮設住宅が立地しましたが，仮設住宅への入居が地域単位でなく，先着順での入居となった弊害として，地域のコミュニティ不足が大きな問題となっています。今後，ソフト面でのコーディネートが求められるところです。
  - 神奈川県の社会福祉協議会のボランティアメンバー40 人規模が同時期に活動していましたが，自治体関連の社協では調布市社協の活動は大変評価されていました。息の長い支援を地道に継続していくことが何よりも必要であると再認識しました。
- 遠野まごころネットのボランティア
  - 震災後，早い時期に全国各地からボランティアに参加し，現在，陸前高田市・大槌町・釜石市ボランィアチームの隊長として活躍している若い方々が数多くおり，頭の下がるところです。彼等の自発的なきめ細やかなボランティア活動によって，多くの被災者がハード・ソフトともに救われています。
  - しかしながら，彼等の生の声として，震災後７か月経過する中で，ボランティアの参加者数

が月毎に大きく減少しており，大震災の風化が進んでいる。とのコメントがありました。

- まとめ
  - 今回のボランティアに参加し，息の長い支援活動が必要であることが再確認できました。現地での被災地支援活動のみならず，こちらに居ながら，被災地産の食品や製品を積極的に消費するなど，個々，できることを日々やっていければ…と考えます。

◇今後の検討事項（第 6 期以降のボランティアコーディネートに向けて）

1. ボランティア参加者の相互の名前と顔が一致しない初日の対応として
   今回の第 5 期では 2 日目に参加者名簿の配布がありましたが，参加者相互で名前と顔を早期に一致させるため，バス乗車時に参加者名簿を配布するとともに，初日のみの使用で良いと思いますが首下げタイプの名札を用意・着用してはどうでしょうか…
2. お風呂について
   初日のオリエンテーション後に水光園のお風呂を利用しましたが，水光園への出発時間・移動時間等を踏まえると，初日の入浴希望者は遠野駅近くの銭湯を利用するかシャワー利用可能施設（総合体育館）でも良いのではないでしょうか…実際に作業・活動する 2・3 日目は，たかむろ水光園を利用してリラックスしても良いのでは…

▲目次へ

吉田　浩之

この度は大変お世話になり、誠にありがとうございました。お陰様で帰宅後に家族へいいフィードバックができました。被災現地の写真を見せ、現在でもまだ復興とは言い難い現状を自分の口から伝えられたこと、それでも復興に向けて色々な支援方法があること、一番大変なのは被災地の方々であること、ボランティアで陣頭指揮にあたっている若い方々がいらっしゃること等々です。

自分の中でも今後の生活において、参加前とは違ったモノの見方、考え方ができるようになれたことも大きな収穫の一つだと思っております。今回、初めてボランティアに参加させていただきましたが、直接的な参加はさることながら、間接的な参加も含めて積極的に取り入れていこうと思っております。時間的な制約もあり、重ねての参加は難しいですが、出来る範囲で出来ることを細くとも長く続けてまいります。

花岡様、本田様にはくれぐれもよろしくお伝えくださいませ。八田様含めてお三方のお力が今回の雰囲気を良くしていただいたことは言うまでもありません。本当にありがとうございました。

甚だ簡単ではございますが、お礼を兼ねてご挨拶とさせていただきます。またどこかでお会いできる日まで。

▲目次へ

加藤　哲也

主催者および参加された皆様にはお世話になりました。活動の感想と気づいたことを報告します。

【感想】

1. 2 日間の活動は畑の石拾いと駐車場整備の整地と比較的軽作業だったため、体力的には余力があった。
2. 1 日と 2 日目は活動場所と作業内容を変えたことは単純作業の気分一新ができて良かった。
3. 2 日目の大槌町の作業において、破壊した防潮堤を見て、テレビの映像では判らない津波の凄まじい破壊力に驚いた。また、コンクリート基礎を残し流失した家屋の整地作業の場が、多くの人が無念の死となった場だと思うと感慨深いものがあった。
4. 個人ボランティアの方と話す機会があった。寝泊り・食事等に加えて団体の作業の中に個人が参加することによる経済・精神面で相当な負担を強いられているよう見えた。今回のバス、公民館を利用したボランティア活動を更に充実させて、普通の人がもっと参加し易くなるよう宜しくお願いします。

【活動中の気づき事項】

気づき事項をメモから抜粋します。（下記は個人の主観です。細かな点もあり恐縮します。）

1. 活動 2 日目終了日に参加者氏名リストが配布された。配布予定ならば初日バス車内の自己紹介の時を希望します。（参加者氏名を早く覚えるのにリストは役立つ）
2. 活動最終日夕食ジンギスカンの費用の自己負担とは以外だった。
   変更により自己負担なら初日に事前説明して欲しい。（初回ボランティアの方は招待だったとの報告だったことから、自己負担は想定外だった。）
3. 頂いた水 2 リットルは持ち運び難く、2 日間の作業に合せて 1 リットル×2 本にして欲しい。
4. 初日作業後の入浴時間 30 分は短かった。
   短くなる事情も解るが、60 分の入浴時間は年配者にはぜひ欲しい。個人負担の入浴に制限時間を設けることに対して指揮者は配慮不足と感じた。

▲目次へ

大久保　明美

まずは活動を終えて強く感じることは、思い切って今回の派遣ツアーに申し込んでよかったなということです。以前より私は東日本大震災で被害を受けた地域に一度は足を運び、実際に自分の目で状況を見てみたいという気持はあり、さまざまなボランティア団体のホームページを見て自分が参加できるツアーはないか探していたものの、なかなか最初の一歩を踏み出すことができずにいました。

しかしながら、いざ参加してみれば周囲も自分と同様にボランティアビギナーばかりで、やや安心しました。また、参加者は、学生から退職後のシニア層まで幅広い年齢層の方々で、さまざまな層の方が東日本大震災の復興に関心を持っていることを感じさせられました。

第 5 期の場合には、一日目の作業場所は陸前高田市、二日目の大槌町でしたが、陸前高田の場合には

既にほとんどの瓦礫撤去が終了しているのに対し、大槌町は被災した建物の一部が生々しく残っていたりと、それぞれの被災状況は異なっており、被災地二ヶ所を自分の目で見ることができたことはとても貴重な体験となりました。

現地での実際の支援活動については、もっとハードな内容を想像していました。遠野まごころネットと各作業場所間の移動に二時間から三時間程度要するため、実働時間は一日あたり四時間程度で、正直なところ、もう少し長い時間作業に関わりたかったという気持が強いです。東京と遠野間の往復に二日間費やしていますので、私個人の意見としては、往復のどちらかは夜行にして現地での作業を三日間にしてもよかったと思いました。

四日間全体を通して言えることは、調布市社会福祉協議会の本田さんや調布市役所の花岡さんが私ども参加者に対してとても細やかな気を配ってくださったお陰で、終始和やかな雰囲気の中で過ごすことができたということです。本田さん、花岡さんのお二人の配慮にとても感謝しております。一方で、ボランティア活動は自己完結が基本である観点から考えると、社協と市役所の担当者の方はあまり動かずに、参加者間で役割分担を決めてもっと積極的に行動させるようなスタイルでもよいのではないかと思います。

活動を終えて自宅に戻った後この四日間を振り返り、今後も継続して震災関連のボランティア活動に参加していきたいという気持ちが自分の中で固まりました。私のような何の特技も資格もない一個人でも少しでも東北の復興に役立つことができるのなら、積極的にボランティア活動に参加したいと考えております。夫に四日間の活動について話をしたところ、夫も大変興味を持ち、次回は自分もぜひ参加したいと申しておりました。この四日間に岩手で見たこと、感じたことを家族や友人等周囲の人に伝えることもまた、私の役目だと考えています。近いうちにまた是非東北地方へボランティア活動に行くつもりです。

最後に、調布市社会福祉協議会主催の企画にも関わらず、私のような調布市在住でない者にも参加の機会を与えてくださったことに対して御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

▲目次へ

小松　増美

1. 初めに

電話と２度の手紙を送った福島市在住の中学クラスメートがおり、飛んでいきたい気持ちと、ボランティアに行きたい逸る気持ちがありながら、ネットで調べることもせず、行動に移すこともせずにおりました。調布市社会福祉協議会が、３泊４日で東北支援ボランティアを募集している記事を見て、この機会を逃したらいつ行けるのかと心に問い、直ぐに申込みをしました。

受入れ先の本拠地は遠野市。娘が盛岡市に４年住んでいたことがあり、岩手県は私にとっても第３の故郷（第２は夫の故郷・長野県）と思っているほど親しみのあるところです。まして、遠野市は民話の里で大好きな町。自転車を借りて、とおの昔村、博物館、伝承園、カッパ淵、かなり遠くにある南部曲

り家千葉家など、市内を回りました。夫が我がボックスで運ぶと言い、２度に渡り娘の家財を積んで、600 キロの道のりを走ったことも思い出されました。後日、バス運転手の高木さんに「プロだから大丈夫なのでしょうが、よく眠くなりませんね」とお話ししたら、「600 キロですからねぇ」と。声の調子からやはり 600 キロは大変なのだとの感をもちました。

2. 遠野市に着いた初日

遠野市に入る近くで、大きな大きな弧を描いて虹が出ており、私たちが来たことを歓迎しているのかなとまるっきり勝手な想いを抱いてしまいました。さらに感動したことは、山のふもとに虹の端の生まれている箇所がくっきりと分かったことでした。

遠野市福祉総合センターに到着時、この地が被災したのかと思うと、ただもうそれだけで胸が熱くなり、涙が出てきてしまいました。私たちは広い自治会館に宿泊でき、座布団の上にマットを敷き、持参寝袋に入り、毛布２枚も貸してくださいました。

3. ２日目----陸前高田市気仙町上長部

１時間半の道のりの陸前高田市気仙町上長部にて、麦畑にするための大小様々な石を取り除きました。あるはあるは取っても取っても石は次々と見つかります。津波で流れてきた石と、傍の河原の石が津波で押し上げられて多くなったかのと話しながら、ただ黙々と拾い出しました。一部の方は向日葵の種取りに行き、和気あいあいと会話を楽しみながら、作業をしたそうです。私は向日葵種出しは楽そうと思い、できるだけ大変な作業をしたいと考えていましたので、そちらは選びませんでした。

ある大学院の留学生と調布市国際交流協会とで、外国の方が日本語を勉強するお手伝いをボランティアでしている関係から、外国の方を見かけると話を聞きたい衝動にかられます。３人の青い目の方がいらしたので、昼食時間に早速訪ねました。山形県からいらしたという、日本に７年住み女児が生れたばかりの日本語がペラペラなイギリス人、来日した彼のお兄さん、そして 10 代らしき若者はノルウェー人。ありがたいことです、感謝申し上げます。

海辺にあった水産加工場のサンマが流され、30m 位の高い木の半分程までサンマが山積みになり、海水と腐魚の臭いで鼻は開けていられなかったとのこと。現在瓦礫は撤去され平らな土地に綺麗になっていますが、想像を絶することです。少し奥に家が数件ありましたが、１階の天井まで津波に襲われたとのことでした。

この日は、実働作業時間は４時間。晴れて暑い日でしたので汗はかきましたが、これでよいのかと物足りなさを感じました。

帰路は別な道の海辺を通り、瓦礫の山は幾つもあり、めちゃくちゃに潰された多くの自動車の山も幾つもありました。

そして、海辺に 70 万本あったうちのたった一本残った松を目にすることができました。木の根元の三

分の一程は青いテープで巻かれていました。枯れているとの声が聞こえましたが、頑張って育ってほしいと願わずにはいられません。

4. ３日目----大槌町赤浜地区

前日に社協の本田氏が明日はどこへ行くこうかと聞いてくださったので、私は別な場所がいいと言い、男性陣もやはり物足りなく、力が余っているとおっしゃり、瓦礫処理の大槌町に行くことになりました。内心よかったと安堵しました、そうこなくちゃ。

朝礼時、外国の方を４人ほど見かけ、傍にいらした男女の方にお話を伺いました。お二人はアメリカ、ジョージア州アトランタから、被災地のボランティア活動のために来日したのだそうです。遠野市のバプテスト教会が発信し、受け入れをしているとのこと。日本人が通訳をしてくださり、遠野市に来る直前に BS で風と共に去りぬを放映されていたことを話すと、話が弾みました。女性はクラウンをされていて、そのカードをくださいました。感謝を伝え、別れました。

幾つもの山々を越えて行くため、曲り道が 184 もあり、１時間半かかって到着。

ここは 70%処理されているとのこと。津波の直後に火災が起き、亡くなった方と行方不明の方々が多いところです。

海に面した東京大学海洋研究所国際沿岸海洋研究センターの建物は残り、ここに道具が置かれていました。この建物の傍には民宿の上に大きな遊覧船が乗りかかり、その姿がありました。

日曜日に赤浜小学校で支援物資の配給があり、600 所帯の人が車で受給しに来るので、今日は駐車場を造りたいとの隊長からの指示。海に接しているこの地域はかなりの範囲で、土台のコンクリートだけが家の痕跡を残していました。７か月前までの生活が全て失われたこの状況を目にすると、言葉は何も出てきません。

車が一台でも多く止められるように、草を抜き、瓦礫を取り除き、側溝の上を被せる重い石をタイヤが乗れるように適度に移動させて、駐車場を確保できました。大勢ですれば結構できるものと皆は口々に言い、人海戦術とはよく言ったものです。細かいガラスの破片が多く、瀬戸物の破片が次に多く、土に埋もれているガラスを石で掘り起こし掴みやすくしてから、怪我をしないように取り除いていきました。

すっかり枯れてしまった花と湯呑茶碗にお茶が入っていたのを見て、平井さんが新しい水に取り換えてくださり、合掌しました。どなたがお亡くなりになったのでしょう----、まざまざとその現実の一つを目にしました。また、ご位牌もあり、探されているかもしれないので、隊長に持っていかれました。今日も実働は、４時間弱。

奥の高い場所に家が何軒かあり、やはり一階の天井までは海水に浸かったとのこと。60 代くらいの方でしょうか、作業しているボランティアに手振りをしながら話をしていました。私のところからは聞こえませんでしたが、家の中の片づけをしてほしいと要望があったようで、その旨を報告したとのことでした。

海を前にして座り昼食を摂っていると、神奈川の方が「あれが、ひょっこりひょうたん島」と言い、井上ひさしが作成したものだと話していました。ほんとに可愛い島。

帰路は隣の釜石市を通りますかと聞かれ、お願いをしてそのようにして頂きました。釜石市の海辺の町は相当な広範囲で家は流され、ビルは鉄筋だけが残っていました。瓦礫の山は高く、またあちこちに点在し、ぐにゃぐにゃに破壊された車の山も多くあり、被害の凄さを物語っていました。家の中を片づけてよい場合は赤の旗を、しないで欲しい場合は黄色の旗を立てることとなっていて、その両方の旗が目に飛び込んできました。ここはまだまだボランティアが入っていないところで、作業が大変遅くなっているとのことです。私はこのようなところで進んでボランティアをすべきだと思います。

余談になりますが、54 歳で病気で亡くなった義弟は、海辺にある大きな水産会社の釜石工場長として単身赴任していたことがありました。奥さんによると、あの日に外や３階までにいた人々はやられてしまい、それ以上の階にいた人々は助かったそうです。

5. ４日目　帰路

6. 全般的な感想

(1)　実働は２日間、時間も少なく楽な作業でしたので、こんなボランティアでよいのだろうかと考えてしまいました。確かに３月～６月くらいは大変な作業をされていたことと思い、７か月も経ってからのボランティアとはかなり違ってはいると思います。

(2)　ゆったりと寝られ、毎日準温泉に浸かり、大変幸せなボランティア活動でしたので、申し訳ない限りでした。

(3)　テレビで見ていた場所に実際に現地に足を運び、多少なりともボランティア活動ができ、大変によい経験をさせて頂きました。社協、まごころネットさん、遠野市に感謝いたします。

(4)　新聞、TV 等で、陸前高田市、大槌町、釜石市の情報を見聞きすると、遠い東北だった感が、私が行ってきたあの場所だとしみじみと身近に感じられます。百聞は一見にしかず。

(5)　４か月も５か月も活動をしている若者たちに頭が下がり、８回も４回も来て活動を目いっぱいされている方々にも頭が下がりました。一度来た人はまた来たくなることがわかりました。来られずにはいられなくなるのです。その気持ちがわかるようになりました。

(6)　最後は人間の手によらないと処理ができない、継続してボランティアはいつでも必要だと、隊長たちが言っていたように、また機会を見つけて来たいと思います。そして、身近な人たちに、”東北”を話し伝えていってほしいとの話もあり、その責任に対して既に実行を開始しています。話さずにはいられませんもの。

(7)　多くの方々と接することにより、様々な情報が伝わり、話すことができ、かけがえのない有意義な４日間でした。

(8)　朝、味噌汁を作っている、また、食後にスッと立ち流しに食器を運び洗う姿の男性陣に、昔にはありえなかったその姿に清々しさを感じました。大変よいことです。

(9)　社協と市役所の引率者が参加者の意見を聞き、取り入れてくれるフレキシブルな柔軟性のある運営で、これについても大変によかったと思います。従って、不満の残らない気持ちのよい活動になったと思います。このようなことが実は大事なのです。

(10)　参加者は 17 人でしたが、最初は顔と名前が一致しないので、名簿を初日の早い段階で配布し、名札を着用するとよいと思います。また、時間制限の中でやりくりが問題となるでしょうが、入浴時間が 30 分は忙しすぎると感じました。服の脱着に時間が取られるので、せめて 40～45 分は必要ではないかと。

緒方　道信

東日本大震災の復興に自分は何が出来るか思案していたところ、市の広報で調布市社会福祉協議会のボランティア募集を知り、参加することになりました。

六十八歳の年齢で、はたしてどんな作業か、皆さんの足手まといにならないか、一抹の心配と不安がありましたが、引率二人と皆さんのおかげで、無事で終わったことに安堵しているところです。

テレビの映像で津波の恐ろしさを見て大変なショックでしたが、今回現地を見て改めて「街の壊滅状態」に驚きました。震災後半年が過ぎ陸前高田市、大槌町とも、すでにがれきの山がいたるところにあり、夏の作業は、さぞ大変だったろうと思いました。

宿泊した遠野市第十三区自治会館では、ゆっくり寝ることができ、区長の菊池さんには朝のおいしい味噌汁をつくっていただき大変お世話になりました。遠野市総合福祉センターでは、京都、新潟、岡山など全国からきたボランティアの方々の献身的な姿がありありとわかり感動しました。

作業の第一日目は、陸前高田市気仙町、畑の石の除去でしたが、石一つ一つを拾い、またスコップで掘り起こし集めて猫車で集める仕事でした。

作業の第二日目は、大槌町赤浜町、駐車場の整地と道路を掃き、側溝整備の仕事でした。

どちらも朝の出発の時は、上着を着るほどでしたが作業開始時は、上着を脱ぎ作業着で、ほどよく一汗をかくほどでした。

ボランティア活動は今回が初めてでした。わずか二日間でほんの少しでしたが、この震災で全国のボランティア延べ人員の一員に参加出来たことに満足しております。機会があれば、また参加したいと思います。

▲目次へ

寺本 忠政

東北大震災被災地ボランティア活動の企画施行に感謝します。

現地に行って感じたことは「まごころネット」のボランティア活動に、そして神奈川県のボランティア活動の活発なことに頭が下る思いでした。五期の参加者に市外の方が多いのには驚きました。定員に市民だけでは埋まらなかったのでこうなったのでしょうか？

我が調布市のボランティア活動が活発になる様に何とかせにゃいかん痛切に感じました。

現地の状況は出発前の想像と大きく隔たりがありました。現地は瓦礫の片付けはすっかり終えており、軽作業があるのみで誰でも出来る作業でした。実際に被災者に会い言葉を交わすことが出来なかったことは少し心残りでした。これからは避難されている仮設住宅でのソフト的な支援ボランティアが必要ではないかと思いました。

個人参加で体育館に寝泊りして、弁当を食べる環境は大変だと思います。その点私達は、温泉付宿泊施設の確保と食事は朝は味噌汁付の食事の手配が行われて大変助かりました。旅行気分にさせて頂き感謝します。

提出が大変遅くなりまして申し訳ございません。来春にまたこの様な企画を計画されたら是非参加させて頂きたく思っております。

▲目次へ

箭内　直

何の変哲もない春の日に、太平洋三陸沖を震源にした東北地方太平洋沖地震は発生し、東日本大震災を引き起こし、1000 年に 1 度とも言われる大津波をもたらしました。

津波は北海道から千葉県に至るまでの広い範囲を襲い、福島県では原子力発電所の電源を押し流し、放射性物質が発電所の外へ放出される程の事故が起きました。

地震が起きた時、誰もがただの地震ではないということを実感したに違いありません。テレビ・新聞・インターネットなどの情報から、被災地では甚大な被害が生じていることが知らされました。それらの被害の情報を見聞きし、少しでも何かの手助けをしなければならないという思いを持つようになりました。

震災の以前から、私は発展途上国向けに古着を提供するボランティアに参加していました。震災が起きると、やがて社会福祉協議会や NPO が被災地支援に動き始め、私のような一般の人間であっても参加可能な被災地支援のボランティア活動が始まりました。

3/31 に、さいたまスーパーアリーナに避難してきた福島県二葉町の方々の避難について手助けをしたことを始めに、4/22～4/29 に東京都社会福祉協議会による「第 4 期被災地支援ボランティア」に参加し、宮城県石巻市・東松島市でのボランティアに参加しました。

私は東京都社会福祉協議会でのボランティアをした後も、被害の大きさを見て、またテレビや新聞報道にあったように、被災地への継続的支援の必要性を感じていました。個人的な事情からしばらくの間、ボランティアに参加できるほどの時間的余裕がなかったのですが、オフシーズンになり、ボランティアに参加できる時間が取れるようになったところに、ちょうどよいタイミングで調布市社会福祉協議会主催の「復興支援ボランティア」を見つけました。私にとっては渡りに船でした。

今回の「調布市社会福祉協議会・第 5 期復興支援ボランティア」では、20 代から 60 代までの幅広い年齢層からの人々と一緒に活動することになりました。

始めにメンバーが集まった時、本当に上手くいくのだろうかという不安や緊張を、場の雰囲気として感じていました。私は震災ボランティアが 2 回目でしたので、実はほとんど不安は感じていなかったのです。きっとこの活動が成功すると始めから信じていました。またこの活動が、私の個人的な活躍の場であるなどとは考えず、ボランティアチーム全体として成功するために協力していこうと決めていました。

私はそのように思いながら活動に参加していたのですが、いかがでしたでしょうか。参加されたそれぞれの方々が、存分に力を発揮できたボランティアであったとすれば大成功だったのではないでしょうか。

また調布市社会福祉協議会の本田さんや調布市役所の花岡さん、同じく調布市役所の職員で個人参加された八田さんが、この活動を成功させようと懸命に働き、気を配っていらっしゃったのを私は見ていました。また被災地のために何かしようと懸命に活動した参加者のみなさんに感動さえしていました。本当にありがとうございました。

被災地に復興のためにほんのわずかでも役に立てたとすれば幸いです。ボランティア参加の機会をいただき誠にありがとうございました。感謝の気持ちをお伝えするとともに、調布市の方々が益々ご健勝でありますようにお祈り申し上げます。

▲目次へ

菊池　美咲

2 日間という短い期間の活動でしたが、多くのことを学び感じる体験をさせて頂きました。

震災ボランティアと聞くと力仕事で体力的に難しいと思い、不安を感じていました。

実際の活動では、細かい釘やガラスを手で拾う簡単な作業だったので安心しましたが、作業範囲が広く、気が遠くなるように感じました。

地道な作業を長く続けていくことが復興につながると知りました。

このときは、土地を小麦畑として使うために瓦礫を拾っていたので、いつになるか分かりませんが、完成した小麦畑を見てみたいと思いました。

活動を行うにあたって多くの方々にお世話になり、ありがとうございました。

特に第 5 期で参加した社会福祉協議会職員の方、市職員の方、市民の皆様と過ごした時間は貴重であり、沢山お話する中で、自分の視野を広げることが出来たように思います。

そして、この機会を用意してくださった調布市社会福祉協議会の皆様に感謝を申し上げます。

▲目次へ

第 6 期派遣　平成 23 年 10 月 19 日（水）～ 10 月 22 日（土）

作業内容
- 1 日目
  - 釜石市箱崎町・大槌町赤浜地区住居跡瓦礫撤去と側溝の泥かき出し
- 2 日目
  - 釜石市箱崎町・大槌町赤浜地区住居跡瓦礫撤去と側溝の泥かき出し、仮設住宅のカフェ、遠野まごころの里コミュニティ向け畑開墾

参加人数　24 人（女性 11 名　男性 13 名）

引率者　街づくり事業課整備係 小林 光輝（調布市）
調布市希望の家 伊東 恵（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第 1 期｜第 2 期｜第 3 期｜第 4 期｜第 5 期｜第 6 期｜第 7 期

参加者の感想（第 6 期）

成宮　毅

今回参加させて頂きましてありがとうございました。会社から今後ボランティア参加は業務に差し障りがあるので、ちょっと遠慮して欲しいと告げられ今回を最後にしようかと思っておりました。しかし、今回釜石を訪問しまだまだボランティアが必要だとひしひしと感じました。ぜひ、また募集されるときあれば一声おかけください。

また、今後派遣を計画されるならば水曜日出発なら土曜日も活動をまたは木曜出発の日曜帰りを希望します。

次回行かれるときのお願いです。是非調布市指定のゴミ袋を持参ください。日本ＨＰから参加の方は、当然調布市住民ではありません。ごみの分別も各自治体毎に違います。今回最終日現地出発前にごみの選別行いました。そこで次回は調布市の分別方法を事前に説明し指定のゴミ袋にごみを捨てて頂いて、そのまま持ち帰るのがよしいいかと今回思いましたました。ご検討ください。

▲目次へ

宇佐美　茂男

私は 5 月と 8 月に仕事で被災地入りしていたので、その惨状は心得ていたつもりでした。「いつかはボランティアがしたい」とずっと思い続けていたところを背中を押してくださった調布市社協の皆様に心から感謝申し上げます。

初めてボランティアに参加してみると、今まで抱いていた考えが大きく変わりました。 それまではボランティアと言うのは、瓦礫撤去等の肉体的な支援活動を想像していました。しかし実際には、被災された方々への精神的な支援活動であることを知りました。釜石でのボランティア・リーダーの方々の「ここは更地にされる計画で、一見無駄に見える活動だが、被災された方々の気持ちになって丁寧な仕事をしよう」の言葉。 そして、地元の方々から豚汁やおにぎり、栄養ドリンク等の差し入れを頂き、過去の

ボランティアの方々の弛まない志が通じているものと、胸を熱くしました。

この貴重な経験を与えて下さった調布市社協の皆様に、繰り返し御礼申し上げます。

自分も引き続きの支援を誓うと共に、周りの仲間に、この「少しでも人手が欲しい」被災地の現状を伝えて行きたいと思います。

▲目次へ

半澤　裕司

この度は貴重な体験をさせて頂き、大変感謝しております。

今回、私は本当にボランティアしに行ったのだろうか？というのが率直な感想でした。毎朝暖かい味噌汁を作って頂き、昼は現地の方に大量のおにぎり・豚汁を作って頂き、宿泊場所も何の不自由の無い環境を提供頂き、食事も全て用意されています。これは調布市、遠野市、被災地、今までのボランティアの方々のおかげだということは分かっています。本当に感謝しております。

しかし、あまりにも恵まれていたため、少し違和感を常に感じていました。これも復旧してきた証だと思いますが、現地を見る限りまだまだ手付かずの場所も多く、ボランティア活動がまだまだ必要だということも感じました。

帰ってきて思ったことは、日本人はやはり素晴らしいなということです。ボランティアに行く側、ボランティアを迎える側双方の考え方が一致しているから、現在、このように恵まれたボランティア活動を行えているのだと思います。

今後ですが、まずは自分の周りの方に被災地の現状を伝え、意識の風化を防ぐことに努めたいと思っています。今後もこの素晴らしいボランティア活動を続けて頂ければと思います。本当にありがとうございました。

▲目次へ

橋本　真由美

今回のボランティア派遣に感謝しています。

3 月 11 日から、何度も“現地に行き何かお手伝いできないか”と思っていました。しかし、ボランティア活動をまったく行ったことがない為、何をどうすればよいかわからず、ネット検索をしては【この団体はどうなんだろう？】【このボランティアツアーは大丈夫？】など、不安で決めかねて時間ばかりが過ぎ焦っていた時に、調布市で今後ボランティア派遣をする予定だと知り、参加させてもらおうと考えていました。

自分の生まれ育った所が企画している安心感で、なかなか踏み出せなかった第一歩がやっと踏み出せました。

現地での作業時間よりも、移動時間の方が長い為か、帰ってきた今でもお手伝いをしたことよりも、現地の方々の温かさや、現地で長期滞在をしながらボランティアをされてる方々の強さや優しさばかりを思い出します。今回参加させていただいたことで、人とのかかわり合いの大切さを学ばせていただき

ました。

実際の作業は、二日間とも私は側溝のかき出しでした。正直、民家に近づく事が怖かったのだと、作業を終えたいま感じます。無意識に、生活感のある場所から逃げていました。

もちろん、側溝からも何がでてくるかわからない怖さはありましたが、作業中は無心で泥のかき出しをしていました。ガラスの破片や古釘はもちろん、色々なものが出てきました。二日目の側溝のかき出しと道路脇清掃では、ワカメのパッケージが新しいままいくつも見つかり、近くに工場があったのだろうなと、思いましたが見渡す限りほとんど立体的なものがなく、目の前にある現実をどこか別世界のことの様に感じました。

今回、被災地を自分の目で見て、からだ全体で感じられたことは、本当に大きな出来事でした。たった 2 日間で、しかもすでに少しは作業が進んでいる場にいっただけで、精神的にダメージを受けていたのですが、引率のお二人をはじめ、一緒に行くことができたメンバーのボランティアに対する考え方・姿勢に支えられて、4 日間辛いどころかメリハリがあり、時には楽しく過ごすことができました。

この様な機会を与えて下さった、調布市・社会福祉協議会の方々に感謝しています。

そして、継続していけるよう、意識を持ち続けていこうと、強く感じた日々でした。支援という言葉では表現できない何かが、あそこには溢れています。多くの人が、作業を手伝える機会がもっとあればいいと思います。これからも、継続をよろしくお願いいたします。

ここからは、要望や施設などの感想です。

- 申込み(FAX にて)
  オリエンテーションも絶対参加ならば、その希望日を記入する欄がほしい。
  事前の道具準備があること、大きいものでは寝袋や長靴など各自用意と簡単に説明があると、わかりやすかった。休みが定期的にない仕事もあるので、買いに行く時間か取れないこともありえた。
- オリエンテーション
  現地の様子を教えていただけるのは心の準備としてありがたかったですが、もう少し持ち物の準備部分を詳しくやって欲しかった(初心者だったので)。
- 道具
  防塵マスクや手袋など、共同購入してもらえると良かった。少量で売っていなかったりしたため。その分は、加算してもらってよいと思います。
- 集合場所
  調布市民ではない人には特にわかりにくかったようです。それに誰が参加者で、誰が調布市のスタッフかわからず、勝手にバスの近くにいて、勝手に荷物をとりあえず積み込んでしまいました。見送りの方々でもかまわないので、誰がスタッフかわかるような指示・動きをしていただけると、

出発前の不安も解消されます

- お水

  現地で配っていただき、助かりました

- 宿泊

  畳で、座布団も使用でき、暖房もあり、タオルなどを干すための線もあり、申し訳ないほど快適でした色々ありがとうございました。

▲目次へ

井口　俊介

朝日さん いつもお世話になっております。

HP との合同参加及び様々なフォロー等色々と有難うございました。ご協力が無ければ自分自身が被災地に行くチャンスは無かったと思いますので、非常に良い経験となりました。

私が今回東日本大震災のボランティアに参加した理由は「現地を自分の目で見て感じる事が重要」だと思ったからです。被災地や被災者の為というよりは、自分自身が今回の出来事を見て感じ、そこから自分なりのアクションをすることが 一番の貢献だと感じたからです。

3.11 以降、映像や写真を TV や新聞等で知る生活が続きました。ただ、東京に住む自分にとっては多少の停電や交通マヒの影響はあっても、生活が変わってしまうような影響はありませんでした。周りの人は東京は大変だった、帰るのが大変だった等とおっしゃる方が沢山いましたが、関東に住む私たちより大変な方々が大勢いる事が分かっていたから、弱音を吐くべきではないと思っていました。

いつかはボランティアに参加してみたいという心の片隅で考えていたところ、会社内で遠野まごころねっとと調布市や調布市社会福祉協議会とのコラボレーションにより募集が掛かり、すぐに説明会に応募しました。説明会で見る写真などに驚きを隠せませんでした。 と同時に、やはり自分も行ってみたいという思いが強くなり、参加を決意しました。

参加させて頂いたボランティアでは、津波にのまれた後の家の家財の整理や、側溝の泥かきを行いました。3.11 から半年以上が経ったといえ、被災地はいまだに大量のがれきが残り、復旧していない状態です。被災者の民家には土足で踏み入れ、言葉では言い表せないような状態となってしまった部屋の片づけを行います。タンスは倒れ、ガラスは割れ、壁紙は全て剥がれたひどい状態です。その中から出てくる衣服や生活用品、写真等が出てくるとその家の家族構成が想像できるわけで、なんともいえない気持ちを感じます。ただ、残っていた衣服や物を整理してその家の方々に渡る手助けが出来た事は、非常に良かったと感じています。側溝の泥も全てが詰まっている為、雨が降るとすぐに道路が冠水するそうです。

全体的に感じた事は、復興にはまだまだ長い時間が掛かるという事と、もっと多く方々がボランティアに参加する事に意味があるという事です。日本人であれば、今の東北を見て感じ、何が自分に出来るのかを考える事が非常に重要だと思います。

いつかまた、自分が参加させて頂いた被災地に訪れ、復興した姿を見る事が自分の夢の一つだと感じています。

▲目次へ

小林　光輝

東日本大震災の復興支援ボランティアの活動を終えて，実働２日間と短い期間であったが，下記の２点を認識することが出来，非常に有意義と感じた。

１点目は，被災地の現況を肌で感じること出来たことである。

大震災から７カ月余りが経過し，メディアの報道では，被災地各地で復旧復興が進んでいると伝えてられている。しかしながら，現地で長らく活動しているボランティアの話や，実際に自分の目で見た被災地の現況は，復旧すらままならないものであり，まだまだ復興への道は遠いものであった。私が二日間活動した釜石市箱崎町は，瓦礫撤去率が約４割と他の被災地より低く，また水道や電気等のライフラインは８月に回復したとのことで，現地を見た時は愕然とし，その情景は今も鮮明に覚えている。被災地では，未だ圧倒的に人手が足りないと感じるものであった。

２点目は，復旧が進んでいない中でも，ボランティア活動を通して，被災者が前を向いて新たなスタートを切り始めていることである。

今回活動した釜石市箱崎町では，他の被災地より復旧が進んでいないこともあり，長らくボランティアと被災者との距離は遠いものであったとのこと。しかしながら，ボランティア活動を通して，着実に交流が増えてきている。実際に，ボランティアが被災した家屋の清掃や遺品の整理をすることで，「気持ちが救われた。」や「新たにこの場所で生活する気力が湧いてきた。」と言う被災者の方々も多いとのこと。

この被災者とボランティアとの関係を大事にして，少しでも被災者が前を向くきっかけになるよう，今後も継続的なボランティア支援を行いくべきと感じた。

現在，被災地では，ボランティアの人数も減少傾向であり，また冬を迎えることでボランティア活動も制限せざる得ない状況にあるとのこと。しかし，被災地では，まだまだボランティアが必要であり，継続的に支援をして行く必要がある。今後も，機会を見つけて，少しでも被災地の支援をしていくとともに，私が見た被災地の状況を多くの方へ伝えて，被災地の事を再度考えてくれるよう促して行きたい。

▲目次へ

堤　由美

今回、私たちが活動を行ったのは、岩手県沿岸部の釜石市箱崎町だった。半年が過ぎ、７ヶ月が過ぎてもなお、津波により、道路の側溝は雨水が流れないほど土砂に埋もれた部分があり、家屋が立ち並ぶ町にはたくさんのガラスや瀬戸物、石やらが敷地の土と混じってあちこち散らばっていた。今までの多くの方の活動によって、車が道路を走れるまでに回復し、３．１１の直後にテレビで見た惨状よりは回復しているとはいえ、まだまだ、人手が必要な状況に変わりはない。

活動前は「ボランティア、それも、ちから仕事なんて、私でも、役に立つのか？」と不安もあったのだが、活動初参加の日の朝礼で、今回お世話になった遠野まごころねっとの方が「ボランティアは競争ではない。当然、ノルマはない。」とおっしゃってくださり、不安が和らぎ、自分で出来る範囲で精一杯のことをするのが大事だと強く感じました。３泊４日、そのうち、支援活動は２日間という、本当に小さな小さな点でしかない活動でした。でも、３．１１が起きて、今日に至るまでの数え切れない方々の支援活動がその２日間につながっていて、また、これから先の、まだまだ果たすべき支援活動につながっていくのだと思いました。私たちが参加させていただいた、ちから仕事以外にもまだまだ支援の道は多岐にわたっていること、そして冬も活動が続いていくであろうことが現地で再確認できました。

このような機会がなければ、一歩を踏み出せなかったと思いますので、このような機会を作っていただき、調布市や調布社協の方々には、大変感謝しております。願わくば、たとえ冬を迎えようと、まだまだ、違う形で被災された方を応援する道はあると思いますし、参加したいと思っている市民もきっと多いと思いますので、活動の輪が広がるよう、きっかけ作りをどんどんしていただけたらと思います。

▲目次へ

市川　有宏

3 月 11 日に発生した東日本大震災、津波が街を襲う映像に圧倒され、すぐにでも被災地を支援したいと思いました。しかし、個人で行くにはいろいろな壁があり途中で断念しました。だいぶ時間が断ちましたが、弊社藤田からの呼びかけのメールを見たときはすぐさま飛びつきました。

行きのバスでは東北道を北上する際に高速なのにガタガタと揺れたり、大きく揺れたり明らかに震災の影響で道路が変形していることがわかりました。やはりかなり大きな地震なんだと感じながら遠野に泊まり。翌日初めて釜石に入り、ボランティアセンターを過ぎてから街の様子が異様なのに心を揺さぶられました。建物は立っているのに一階部分は柱が残るだけで中が空っぽ、暫く行くと建物の跡形もないところもあり。

私達が派遣された箱崎町は半島の袋小路になっているということもあり、支援の手があまり入っていないということでした。それでも遠野まごころネットの方々が長い間支援に入っていらっしゃいました。にも関わらず、あたりは雑然としていて、まだまだ人の手を必要としていました。今回担当したのは側溝の泥出し、津波で埋まったままの側溝から土を掻き出す仕事です。事前には根詰め過ぎないようにと言われていましたが、いざ眼の前にある状況を見ると否が応でも力が入ってしまいます。結局頑張りすぎて筋肉痛になりましたが、それでも大したことではないと思っています。

作業の合間に周囲を見渡すと津波の悲惨さが伝わってきます。幹の途中で叩き折られた様な樹木、電柱もへし折られている、家は殆ど流されているけど、流されていない家も大きく損傷し、取り壊されること無くそのまま残っています。風でカーテンがひらひらしている様は人間の無力さを感じさせます。

箱崎に行ってよかったことは被災者の方々と身近に接することができたことです。いろいろとお話を伺うことも出来ましたし、豚汁をごちそうになったりと恐縮する場面もありました。

二日間同じ場所を担当させていただき、初日と二日目で新たな発見もあり、同じ場所で支援活動をするのも意味があると感じました。

現地での活動はあっという間に終わってしまいましたので、機会があればまた現地に行きたいと思います。そして、現地で見て感じたことを少しでも多くの方に知っていただきたいという気持ちでいっぱいです。どう感じるかはそのひと次第ですが、何か具体的な行動に出る人が出てくれる事を期待しています。

▲目次へ

宮崎　哲郎

10 月 19 日より 3 泊 4 日で調布市社協主催の復興支援ボランティアに参加させてもらいました。

東日本大震災の被災地でのボランティアは初めての事でしたので役にたてるのかどうか（年齢が 60 を過ぎているのもあり）一抹の不安を持っての参加でした。実際には現地釜石市箱崎町での作業は一日三時間半位でしたので天候にも恵まれた事もあり、それ程つらさも感じられずに作業できたと思っております。

今回現地に行っての感想ですが、バスで釜石市に入り活動場所の箱崎町に向かう間、あまりの復興、復旧のおくれをまのあたりにしてすごいショックを感じ自然と涙がでてきました。あれから七ヶ月も経つのになぜ？という疑問を非常に強く持ったのが本当の所です。 現地をみてまだまだやらなければならない事が山積みされていると思いました。

調布市社協主催の支援ボランティアは今月で終わりの予定ですが、これからも継続して 主催していただく事を強く希望いたします。調布市社協の支援活動は小生のような年配者にとっても大変参加しやすい（時間的、費用的にも）企画だと思います。

企業ボランティアの参加の基準は再考する余地があると思いますが、是非被災地の方が支援を必要としている限りこの企画を継続して頂きたくよろしくお願いします。簡単ではありますが、これで感想とさせて頂きます。

▲目次へ

石川　恵

3.11 以降 東京で出来ること以外に、休暇に現地ボランティアに参加したいと考えていました。でも東北は遠いし、もやしっこが役立つか正直不安で。色々言い訳をつけて 10 月頃にいけたらと思っていて、重い腰を上げました。

岩手は意外に近く バスで 9 時間余り。期間延長してまごころネットにお世話になり 次の活動をさせて頂きました。

・釜石市箱崎町で側溝掃除、

・大槌赤浜で住居跡の瓦礫撤去・側溝

・遠野市内 仮設住宅での 1 日カフェ

・遠野まごころの里でコミュニティ向け畑開墾

今回一番印象に残ったのは、箱崎です。遠野から 1.5 時間、箱崎トンネルを抜けた先の小さな漁村。大きな瓦礫は見た目には片付き、建物の土台や塩害で赤くなった林に残った家が高台にあり、ここにふつうに家や船が並んでいて、日常の跡さえない。かもめが遊ぶ海と空が美しすぎて、痛々しい光景でした。

作業時間は午後 2:30 までと短く、仮設トイレや作業道具も完備、支障なく作業ができたものの小さなバス停清掃に 3,4 人で 1.5 時間、側溝 2,30m 程を 20 数人で 2 日。できることはほんの少し。ここまで片づけるのに先人が労力を要したか・・当地区の瓦礫撤去率は 40%、まだそんな場所もあるのを知りました。

箱崎地区は新都市計画では更地になる予定です。でも 瓦礫の撤去が被災者の心のケアにつながる、と仰った隊長の船田さん、遠野からのバス車中、ずっと被災状況をガイド頂いた吉野さん町が壊れても、残り続けて私達にご馳走を振舞って頂いた箱崎の皆さん、尊敬するばかりです。被災地を立ち去らない気持ちも少しわかった気がします。

遠野の方々にも多大な配慮を頂きました。暖かい環境を提供頂いた 13 区長菊池さんと奥様、自衛隊の撤退以降も、後方支援地として私達も受入てくれる遠野のまち。同僚から呑む度聞かされた三陸の海と自然の素敵さ、こんな事情で現地に赴くとは夢にも思いませんでしたが、再会したい場所も人もできました。

入替り立替りの短期ボランティアに、預金通帳の残高に怯えながらの長期の方、皆ずっと居られるわけではないので 私もまたバトンをつないでいければと思います。

もっと早くに足を運べばよかった。でもまだまだ始めるのは全然遅くなくて来年、さ来年、5 年 10 年と今後も関わっていきます。

最後に、団体として赴けたことで安心して活動できました。また同様に暖かい気持ちで赴いた参加者の方々と知り合えたのは大きな励みです。ありがとうございました。

▲目次へ

西分　美喜

10 月 19 日～22 日まで、岩手県遠野市を拠点としたボランティア活動に参加させていただきました。

私たちが今回活動した場所は、岩手県釜石市箱崎地区という場所で、住民の 3 分の 1 が漁業に携わっていた港町でした。

そのため、街は海に面して形成され、沿岸部は全ての建物が全壊してしまった場所でした。

箱崎地区のがれき撤去率は震災から 7 カ月が経過した今でも 60%、これは周辺地区に比べても非常に遅れている状況だそうです。

それゆえ、私たちの活動内容の多くががれきの撤去作業や泥の取り除き作業でした。

この箱崎地区で私が見た光景は、ブラウン管を通して見るそれとは感じ方が全く違うものでした。

これだけ報道がされていても、実際に自分の目で見ると、ショックで言葉も出ませんでした。

震災から７カ月が経っても、がれき撤去も終わらない、変わり果ててしまった街の現実を受け入れることは、そこが故郷である人たちからすると、どれだけ難しいことなのか、被災していない私には分からないことですが、時間の経過だけでは解決しないということは確かなのではないかと思いました。

今回団体として参加させていただいた私たちに今後できることとして、まずは会社の公認活動としてこの活動を継続することができるよう、会社へ働きかけを行っています。

一人でも多くの人が、この大震災を忘れないよう、何か出来ることを取り組んでもらうことができるよう、ボランティアの輪を広げていきたいと思います。

最後になりましたが、現地ボランティアへ参加する貴重な機会を与えていただいた、調布市の皆様、まごころネットの皆様をはじめとした現地コーディネーターの皆様、有難うございました。

▲目次へ

小宮　絵美子

第６期に参加させていただきました。

参加前は、自分で役に立つことがあるのか自信もなく、また現地の惨状を見てショックも大きいのではとの不安を抱えておりました。

実際に参加してみて、東京でただ考えるだけで行動しないより、動いて微力ながら作業できて本当に良かったです。

二日間、釜石市箱崎町にて作業しました。

現地はまだまだ当時の状況のままのところも多く、被害の大きさを物語っていました。

１日目は被災された家のがれき撤去を行いました。

途中家主の方が差し入れを持ってきてくださり、お会いできたことでお役に立ちたいという気持ちも増し、無心で作業しました。

またお昼には地元の方達からお昼ご飯の差し入れをいただきました。前日にはボランティアのために、きのこを取りに行ってくださったお話を聞き、大変の状況の中で人を思いやれる強さに感動し、いただいた差し入れの美味しさは忘れられないです。

２日目は道路清掃・側溝の泥出しを行いました。

バス停の近くの草むしりを行い、バスを利用される方が気持ちよく使えるように作業しました。

お天気も良く、山や海の自然が豊かな土地で、本当に震災前は住みやすく過ごしやすい街だったのがうかがえました。すべてをさらっていった津波の恐ろしさを感じるとともに、少しでも以前の状態に戻れるようただただ願っています。

笑顔を忘れずに頑張っている地元の方に触れ合うことによって逆に元気をもらってきました。

現地で活動されているボランティアの方々の熱い思いもみて、心が温まり、今後もどういった形でもいいので協力できるように努めていきたいです。

今回参加させていただけて本当に良かったです。ご関係者の皆様に、あらためてお礼申し上げます。

▲目次へ

山賀　好子

初めての被災地支援ボランティア活動参加なので、現地に到着するまではかなり緊張していました。寒くなりかけた遠野の区民会館での３泊、被災地で元気に 2 日間ボランティア作業（たぶん力仕事？）に従事できるか、そして無事、迷惑かけずに戻ってくることができるか・・・等々不安もありました。

ところが、まだまだ悲惨な被災地の現状を実際にこの目で見、その空気を体感しながら現状を知ることができて本当に有意義な 4 日間でした。そして一人一人は微力でも、皆で力を合わせれば、大変な作業も着々と成果を上げることができるという貴重な体験もすることができました。

その上何より心に残ったのは，「箱崎地区」被災地の方々の温かいおもてなし(なんと昼に豚汁の炊き出し！)と暖かい気持ちです。本当にごちそうさまでした。これは、3.11 直後の大変な時期から地道なボランティア活動を継続させてこられた現地ボランティアスタッフはじめ、きつい様々な作業をこつこつと続けてこられた各地から支援に来られたボランティアの方々の継続の成果であると思います。閉鎖的な小さな漁村ゆえに、ボランティア活動に対し初めは頑なだった地元の方々も、全力投球のスタッフの熱意とその地道な活動を目の当たりにして、徐々に理解が深まってきたのでしょう。10 月からは特定の場所からの写真撮影も OK となりました。そして遠野の宿泊先「区民会館」の区長さんの温かいおもてなしはボランティア作業の疲れを癒してくれました。本当にありがとうございました。

緊張で始まった私の被災地支援でしたが、1 日目はかろうじて残った一戸建ての家の整理。二階の天井付近まで津波が襲った痕跡のある家の中で、塩水につかって埃まみれになった「家族の思い出の品物の整理・分類作業」でした。2 日目は調布勢全員で側溝掃除。泥まみれになりながらスコップで側溝の泥を掻き出す力仕事でしたが、詰まっていた側溝が数十メートルにわたり泥一つなくきれいになり、付近の土手のゴミも一掃すると達成感いっぱいに（これを自己満足というのでしょうね）。そして作業の達成感以上に地元の方々の優しさに触れ、逆に私の方が癒された 4 日間となりました。

今回の貴重な経験で学んだこと、感じたことをできるだけ多くの方に知って頂き、今後まだまだ被災地ではいろいろな形の支援が必要なことを，機会がありましたら伝えていきたいと思っています。

今回ご一緒しました第 6 期のメンバーの方々にもお世話になりました。ありがとうございました。

復興支援ボランティア活動報告

10 月 19 日（水）

10 月 19 日朝 8 時過ぎ、市役所駐車場裏から中型マイクロバス 2 台を連ねて総勢 24 名、岩手県遠野をめざして出発。秋晴れの東北道を延々10 時間・・・やっと遠野ボランティアセンターに到着。次の日 20 日のボラ活動地候補を皆で決めた。活動内容と人数を考慮して釜石のがれき撤去作業を希望する。

翌朝の朝食をスーパーで買った後、3 泊お世話になる「区民会館」へやっと 8 時頃到着。大きなストーブがあったので，支給された銀マット、毛布 2 枚に持参したシュラフで十分暖かかった。

10 月 20 日（木）

７：１０am 「遠野ボランティアセンター」に集合。冷え込みが徐々に厳しくなるこの時期も多数のボランティアが各地から集合して来ていた。センター長、各地区隊長らの挨拶・注意事項を聞き、ラジオ体操で今日の活動が始まった。８：００am 調布組は大型バスで希望通り釜石地区へ。朝靄の中、色づき初めた遠野の山々や自然をバスの窓越しに眺めていると、あの地震・津波の猛威が嘘のように静かで平和そうに感じた。

しかし、釜石市に入り、海岸に近づくにつれ街中に廃墟が現れる。一階部分がめちゃめちゃに壊れた商店街の建物、鉄骨だけ残った建物・・・今回の津波の爪痕はテレビの映像で何回も見た光景だが、実際に初めて被災地の空気の中で瓦礫と化した街の光景を見た時、背筋が冷たくなり、体じゅうに大きな衝撃が走った。

釜石市の無残な光景を後に、バスはさらに大槌湾方面に向かう。小さな湾に面した「両石地区」は津波が防波堤を軽々乗り越えて村は壊滅。「鵜のとまり地区」もなにもかもがなくなってしまっていた。無残な瓦礫の山また山、そして海辺で大きく傾く廃屋・・・そんな非情でいたたまれない光景が目に焼き付く。そしてやっと大槌湾に面した箱崎地区へ到着した。

小さな平和な漁村であった「箱崎地区」も何もかも津波で流されてしまっていた。家屋のコンクリート土台のみが道路の両側に残っている。すべてが流されてしまった平地の先に、穏やかで美しく輝く真っ青な海が目に飛び込んできた。背中合わせで存在する自然の美しさと脅威・・・。少し高い場所に建つ家々は、外見上は被害が少なそうだが人の気配はない。かろうじて建物が残った小学校とその周辺がボランティアセンターとなっていた。小学校裏の空き地は、津波の引き波で海の方に流された多くの物や住民たちが、この小学校の校舎でくい止められて、大勢の犠牲者が発見された場所だという。いたる場所で被災者のご冥福を祈る合掌をせずにはいられない。

スタッフから説明を受けた後、50 名程のボランティアが割り振られた作業を開始。私は班長さんと 5 名のボランティアの方と一緒に、かろうじて残った一戸建ての家の中に残された大小様々な物品を仕分け・分類し、整理する作業にあたった。

家の中は，２階の天井辺りまで津波が来た痕跡があり，タンスの中の衣類や布団からすべてが塩水につかりめちゃめちゃな状態であった。その中から「家族の思い出の品物」を探し出して仕分け、整理した。

この日は地元の方々がお昼に炊き出しをして下さり，山でとったキノコのおいしい豚汁とおにぎりを頂いた。とても暖かいもてなしを受けて、逆に私の方が癒された気持ちになりました。

10 月 21 日（金）

昨日同様７時に「遠野ボランティアセンター」集合。希望の「大槌地区」には行けず，昨日と同じ「釜石・箱崎地区」へ。調布からの一団はほとんど全員で主要道路沿いの側溝清掃と道路脇の瓦礫撤去にあたった。

▲目次へ

第 7 期派遣　平成 23 年 10 月 26 日（水）～ 10 月 29 日（土）

作業内容
- 1 日目
  - 陸前高田市上長部地区にて畑の整地
- 2 日目
  - 大槌町赤浜にて水路の瓦礫撤去

参加人数　26 人（女性 14 名　男性 12 名）

引率者　総務課公文書管理係 安倍 俊雄（調布市）
総務課 嵐 祐子（社会福祉協議会）

リンク：目次｜第 1 期｜第 2 期｜第 3 期｜第 4 期｜第 5 期｜第 6 期｜第 7 期

参加者の感想（第 7 期）

四方　英蔵

10 月 26 日から 29 日の調布市社会福祉協議会主催の東北震災復興支援ボランティアの第 7 期に参加させていただきました。

- **メンバーについて**

  参加メンバーは 20 代から 60 代まで総勢 26 名で、全員の名前を覚えるのも大変な状況でしたが、皆さん志願して参加されただけあって、とても気配りができており、何をするにしても、自ら役割を見つけ出して、あっという間に片づけてしまう手際の良さに、ただただ感心するばかりでした。

  男女の比率としては男性 12 名に対して女性 14 名。男性の既婚率が 9 割近かったのに対して、女性はかなり低かったようですので、女性が男性より社会貢献に対する関心が強く、また既婚男性の配偶者への家事依存度を示しているようにも思えました。

- **被災地支援活動について**

  一日目は陸前高田上長部地区で、畑づくりのための土地の片づけをしました。この地区は津波により、水産物の倉庫が直撃を受けたため、冷凍サンマ、サケ、イクラが広い地域に大量にばら撒かれ、腐ってウジがわき、瓦礫が散らばるうえに、強烈な悪臭がする最悪の状況だったと、ボランティアの隊長に聞きました。

  我々が行った際は、腐敗した海産物の改修は完全に終わって全く臭いも無く、海側の土地も整備されてグランドになっていてとても奇麗に見えました。しかし、一見野原に見える辺りの雑草を刈り取ってみると、住居の基礎らしきものが現れたり、水道の蛇口や、誰かがつい最近まで使っていたと思われる、きれいな湯のみが見つかったりと、畑にするにはまだまだ時間がかかりそうであることが感じられました。

二日目は大槌町の東京大学海洋研究センターの敷地脇で側溝の清掃を行いました。現地に向かう前に釜石を抜けたのですが、釜石駅のそばにある大渡橋を越えた途端、津波で低層部分を破壊された建物の残骸が延々と続く、市街戦跡地のような景色に一変したことに衝撃を受けました。

この日の作業は、側溝内の砂利のき出しと側溝蓋の再設置という力仕事だったのですが、皆で協力して作業終了予定時間の 14 時 30 分前までに終わらせることができました。

大槌の海は、とてもキレイでした。カモメやトンビが飛ぶ澄んだ空と、昼時の日の光を受けてキラキラと輝く海に対して破壊されて、斜めに傾いた防波堤と、その向こうにうず高く積まれた瓦礫の山が異様な対比になって、記憶に焼き付いています。また、12 時の時報代わりに流れていた「ひょっこりひょうたん島」のテーマに、地元の方々の覚悟を感じました。

「苦しいこともあるだろさ　悲しいこともあるだろさ
だけど僕らはくじけない　泣くのは嫌だ笑っちゃおう　進め！」

二日目の作業を終えて、帰りのバスの中から、街の景色を眺めていたところ、ほぼ鉄骨だけとなった建物が幾つか立ち並ぶ一角で、道路の目の前に「ありがとう」というメッセージと、ハートのマークが大きく手書きで書かれていました。それが目に入った時、不覚にも涙が出てきてしまい、誰にも見られないように、ずっと顔を窓の外に向けていました。

- **最後に**

2011 年に自分に課した課題の 1 つが、「ボランティアへ参加する」でした。3 月に震災が起こり、海外から現地へ乗り込んでくる人が多くいることを知り、また、乗り越えるには日本全体でサポートするべき、との意見を耳にして、自分も必ず東北に行くと、震災直後から考えておりました。今回、その意思を、行動に移す機会を与えてくださいました、調布市被災者支援ボランティアセンターの皆様に深く感謝します。

復興支援活動は、瓦礫の撤去から、被災者の心のケアという形へ移りつつあると聞いていますが、まだまだ現地でしかできないことは多々あると思います。今回参加された多くの方が感じたように、自分も、いつか再び東北に行きたいと考えております。

▲目次へ

吉田　勝寛

今回の支援活動について、安全にかつ気持ち良く作業させていただけたのは調布市社協の皆さま、調布市被災者支援ボランティアセンターの皆さま、遠野まごころネットの皆さま、星運輸の運転手さん、区長さん、その他多数の皆さまが様々な準備をしていただいたおかげです。本当に感謝しております。どうもありがとうございました。それから、一緒に作業した七期の皆さま、みなさんのおかげで楽しいボランティア活動となりました。どうもありがとうございました。

いくつか感じたことを、思いついたまま、書きたいと思います。

1 日目の活動は、陸前高田町気仙町の草刈＆石ひろいでしたが、隊長の言葉が印象に残っています。”数ヵ月後、あるいは 1 年後、10 年後でもいい、復興したこの町をもう一度是非見に来てください。みなさんがかかわったことを忘れないでください。”

私がおこなった作業は、ちっぽけで、大したことではないけれどもこんな私でも、少しでも誰かの役に立てたんだという気持ちにさせていただきました。この言葉で、私はなんだかサポーターになれた気がしました。これからも応援を続けていきます。そしていつかこの地を訪れたいと思います。

2 日目の作業は、大槌町東京大学大気海洋研国際沿岸センターの側溝清掃作業でした。陸前高田もそうですが、岩手の自然（美しい島や海、木々の緑や田園風景）はどこも本当に素晴らしかったです。そんな美しく雄大な自然の中に、津波に破壊された建物と打ち上げられた船があまりにも対照的で一方では雄大で美しく、一方で残酷な面をもつ自然の力に言葉を失ってしまいました。

近くに見えた蓬莱島は、ひょっこりひょうたん島のモデルとなったそうです。お昼になるとひょっこりひょうたん島のテーマ曲が流れるのですが、”ぼくらを乗せてどこへ行く”というフレーズが頭をよぎり、なんだか今の日本の現状とリンクするなと思ったのと同時に、なぜかピアノの旋律が物悲しく聞こえたのは、私だけでしょうか？

津波の爪痕を実際にこの目で見て、映像で見たものとはやはり実感が全く違いました。想像をはるかに超えており、リアルに受け止めるのが難しいです。本当に胸が痛みます。一日も早く、復興方針が決定され早期復興が進んでいくことを願って止みません。気持ちとしては、ボランティアに何度でも行きたい気分ではありますが、すぐに行けるかはわからないので、今は自分のできる範囲でできることをやっていきたいと考えています。対岸の火事にせず、被災地のことを忘れず、手をとりあってこの国の未来をみんなで考えていくことが大切であると思いました。

▲目次へ

松下　マエス

AB 型の阿部さんのお話が未だに忘れられません。ボランティアの感想文、遅くなりましたが、送らせていただきます。第 7 期同窓会・調布ボランティア大同窓会、楽しみにしております！

今回のボランティア先の岩手県は、5 月に行った宮城県石巻市と比べて、いくつか異なる点があった。

①街の建物がほとんど取り壊され、基礎だけになっている

②活動中に他の団体が見当たらないほど、ボランティアが少ない

③強烈な腐敗臭は、ほとんどない

もちろん 5 月と 10 月の時間差が変化の理由の一つだ。また、①と③は今まで多くの復興作業が進んできたことを意味する。それ以外にも、ニュースでよく聞く持論を裏付ける発見があった。

建物の様子（①）に関して、地域ごとの被害の違いが大きいことが分かった。石巻駅付近の場合、津波は 1m ほどだったため、家は汚れたが住める状態のものが多い。修繕すれば、街や商店街が復興する

印象をうけた。逆に大槌町は建物を取り壊し、平地にした部分が多く、街の再建にはかなり時間がかかりそうだった。地盤沈下した土地の処遇も難しい。

また、震災から時間がたち、ボランティアがどんどん少なくなっていることを肌で感じた。5 月のボランティアは、テント暮らしをし たり食料を 1 週間分持ち込んだりなど、準備が大変だった。にもかかわらず、石巻市は様々な色のゼッケンをつけた、長靴のボランティアであふれかえっていた。現在は、滞在条件に恵まれているのに人が少ない。

ただ、これらの問題に対しすぐ何か個人で対処ができるとは思っていない。まずは近場で、例えば、最近社内のボランティア事務局が発足した。ひとつひとつ自分ができることを探し、現地の状況を伝えたい。この感想文を書くことが第一歩だと思う。

調布社協、まごころネットの隊長さん、引率の職員の方、ボランティアの仲間、そして遠野でおもてなしをしてくださった菊池さん！ありがとうございました！！

▲目次へ

武田　路和

震災後、半年以上経過してやっとボランティアに参加することができました。

調布市社会福祉協議会や調布市の方々、他の参加者の皆さまのお陰で大変有意義な四日間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

被災者の方々、被災地に対して、微力ながら少しでもお役に立てていたなら幸いです。

実は、初日は、どう皆さまとコミュニケーションしたら良いか、いきなり飲酒はどうなのか、などと戸惑いもありましたが、お酒が潤滑油となって急速にお近づきになることができ、翌日、翌々日の作業が順調にはかどったことなどを思うと、これも良かったのかなという気持ちにもなれました。

そんな中で、菊池様始め地域の方々とも触れ合い、また他の参加者の皆さまとも交流を深めつつ協力して活動することができたこの四日間は、これからの私にとって財産になると思います。

まだこちらに戻ってきたばかりで、今回の災害を自分なりにどう捉えれば良いものか、気持ちの整理がついていませんが、被災地で実際に活動し感じてきたことをもとに、これからじっくり考えていきたいと思います

▲目次へ

村瀬　航太

■支援活動を終えて

震災直後、「ふだんと同じ生活をすることが復興の手助けになるんだよ」と友人が言いました。東京にいる僕たちまでが気分を暗くして家の中にこもっていると、消費が冷え込み、東北の経済がますます停滞してしまうからだそうです。世の中のしくみに疎い僕は、その場ではナルホドと感心したものの、なぜかすっきりしませんでした。

10 月 27 日～28 日の 2 日間、ボランティアに参加して岩手県の被災地を訪ねました。津波に襲われた町は、壊滅という言葉が生やさしいと思えるほど、どこも悲しく沈んでいました。空は澄み、山々は紅葉で色づき、海は透き通るように青いのに、人の気配はおろか、生活の痕跡がまったく感じられませんでした。僕たちはそこで伸び放題になった雑草を刈り、がれきや石を拾い集め、側溝の土砂をすくったり、重い蓋をはめ直したりして汗を流しましたが、手を休めて集落全体を眺めていると、しばしばむなしさに襲われました（建物の基礎部分だけを残した町らしき場所は、色彩を失った古代ギリシア遺跡のようでした）。

そのとき僕は、あの日この場所で何が起きたのかを初めて知りました。ひとつの集落が無くなるということは、そこに暮らす人々の世界が無くなることだったのです。星が消滅するように、喜びも悲しみもひっくるめて、すべてが消えてしまうのと同じことだったのです。

感傷が何の役にも立たないことは承知しています。確かに経済の復興は重要だし、被災者への生活支援が目下の緊急課題であることは異論を挟む余地もありません。だけど、あの光景を見てから、訳知り顔で震災を語り、部外者のような立場で復興を考えることはもうできなくなりました。ふるさとを失い、肉親や友人を亡くした方々と心の痛みを分かち合えるなどとは思いませんが、今回現地で悲しみの深さを想像したことは、僕にとって震災を考える上での大きな出発点になった気がしています。

10 月 31 日、震災から 234 日目の夜に

▲目次へ

山口　智

第 7 期の皆様　活動及び長旅、お疲れ様でした。

被災地に行き、テレビの映像と同じ場面でも、実感が全く違いました。多くの人に、被災現場を見て欲しいと思いました。

小松お母様が、休みなくスコップ作業をしているのを見て、タフさに驚きました。親子で参加されるのは、素晴らしいと思います。大土（オオド）さんの講釈を、また聞きたいです。自分は、あまりお役に立てず、邪魔ばっかりしてたと反省していますが、柴田さんの before/after の写真で癒されました。

側溝作業の際、リーダの方に、「最終的には行政が復旧させるが、被災者の方に被災を忘れて貰うために、綺麗に片付ける」のだと聞きました。今回関わったのは、被災地のごくごく一部です。活動は、継続する事に意味があると改めて思いました。

一方、作業場所の横や街中に、巨大な瓦礫の山が多数あり、これを無くさないと被災者の心の整理はつかないだろうと思います。行政にも頑張って貰いたいと思います。

No1、No2 はじめ、皆さんのお陰で、楽しく活動を終える事ができました。有難うございました。嵐さん、阿部さん、お世話になりました。ケチな日本 HP さん（自分も社員です）、活動支援、もっと何とかならないですかね～。調布社協さんは、もしかしたら最後になるかも知れませんが、

絶対また行くぞ～！

何回でも行くぞ～！

東大研究所のそばの弁天島（蓬莱島）は、本来は港から繋がっていたようです。そんな形跡は、気が付きませんでしたが。防波堤で陸続きになっているので歩いて渡ることができる。ひょうたん形の島で「ひょっこりひょうたん島」のモデルとなった島ともいわれている。

▲目次へ

大土　洋

具体的印象から。活動初日の現場である陸前高田市内は５が月前と比べて、瓦礫の撤去は進んでいた。しかし、特定地域での整地作業を行っていると什器が多数掘り出され、ここが日常生活を根こそぎにされた場所であるということを痛感させられる。

２日目は大槌町。ここの今は穏やかなリアスの海を見ていると、自然現象を人間が想定するなどという発想が如何に不遜であるかがわかる。

両日を通じての総括として、被災地は今後も継続的な人・物的支援を必要としているということになる。

次にボランティア活動一般について。

「ボランティア」とは何か―――についての論考の中で、私が共鳴するのが『「ボランティア」の誕生と終焉＜贈与のパラドックス＞の知識社会学』（仁平典宏著・名古屋大学出版会）である。その論の核心は､“ボランティア活動という行為の孕む「偽善（贈与）性」に賭け、これをあえて引き受けることによって外部の批判に耐えること”である。昨今多く見聞きする俗流「生きがい進化論」に組みしてはならないと考えるものである。何故なら、被支援者を喰いものにしてこちらの楽しみを求める危険性が常に待ち受けているからである。自戒を込めて。

最後に。この度の支援活動においてお世話になったスタッフの皆様、また、縁あって４日間という時間を共有させていただいたお仲間の方々に改めて感謝を申し上げる次第です。

了、

▲目次へ

高野　眞弓

支援活動を終えて

３月に東北の大震災が起こってから私に出来る事は何か無いかと気持ちが落ち着かず、気がついたら社会福祉協議会のボランティア派遣に申し込んでいました。

目で見る被災地はテレビより悲惨で言葉もありませんでした。陸地に流されたままの船、建物は残って居ても中は空洞の家屋。側溝や畑には結婚式の写真やお皿、スリッパなどが埋もれていました。基礎だけ残し全て流された家の跡にポツンと置かれた梅干しの瓶。それなのに何事も無かったかの様な青い海と空。余りにもミスマッチな現状を目の当たりにし、一瞬に全てを失った人達の苦悩を決して安易に語ってはいけないと思いました。

でも私に出来る事は他にも有る。それはこの未曾有の災害を決して忘れず伝えて行く事も大切な一つと感じました。今回、ほんのチョッと関わらせて頂いた陸前高田と大槌町は元より全ての被災地の復興を心から願っています。又機会があれば是非参加したいと思います。

▲目次へ

大田　さゆり

今回はじめて、岩手県での被災地でのボランティアに参加させていただきました。

5 月以来、宮城県は毎月ボランティアで訪れ、町全体が壊滅している所もみていましたが、今回岩手県沿岸被災地を訪れるまでは、釜石あたりはボランティアの人数もだいぶん異なるようですし、被災度合いがすこしはましなのではないかと、きちんとした根拠もなく思っていました。その予想は大きく外れ、まだ応急手当しかできていない半壊の家も多い釜石の町並み、町ごとなくなっている陸前高田の市内あとをみて、言葉を失いました。

がれき処理はかなりすすんでいるようにはみえたものの、新しい町をつくるという地点にはまだまだ遠い道のりを感じ、この光景をみながら毎日すごされる住民のかたの気持ちを心痛くおもいました。

そんななかで、遠野まごころネットさんの長期のコミットメントと地域またボランティアセンターの方から得ている信頼を強く感じました。注意事項も、「個人のお宅のあったコンクリート土台の部分に土足でふみこんではならない、座ってもならない、そこは彼らの暮らしがあったところなんです」、という厳しいまでにも被害者の気持ちに立ち続ける姿勢と、そのことをしっかりボランティア全員に知らしめていることも、彼らの活動の基本姿勢が感じられ、個々人の行動のすべてからどんな気持ちでボランティアに臨んでいるかが見えるのだということを改めて自身に戒め、身のひきしまるおもいでした。

1 日目は畑の瓦礫をとり、草をとって畑にかえすことで少しでも平和なのどかな風景が戻り、陸前高田の仮設住宅で生活されている方が、明るいきもちになってくださることを願い草をかり、ガラスなどのごみを丁寧にとる作業をしました。一見のどかに見える山間のその地も、向かい側一体は住宅が密集していたひとつの村落だったがすべて流されたと作業後にコーヒーをさしいれてくださった村長さんからうかがいました。そして、仮設の建設がいったん却下されたため、ちりぢりになった人も多くその後、9 月になってから仮設ができた時には引っ越しの選択を決定が変えられないものになっていた方も多かったそうで、コミュニティが壊れていく様子をはっきり知らされました。

また、2 日目の大槌町での作業は 3 月以来そのままとなっている水路の泥かきで、津波で流された様々な生活用品が泥といっしょにでてくるなかで、5 月―6 月に被災地で作業していたころを思い出し、いまだにこのような場所がまだたくさんあるという事実をもっと多くのかたに知ってほしいと思いました。壊れた堤防もゆがんだ金属の柵もそのままで、そんななか、水路脇にいくつか無事に残った船が保管されているものの一艘に、漁師さんが塗装をしにきていたのが印象的でした。

あとで聞いたことですが、岩手県は被災 3 県のなかでもボランティアが少ないという話もあるそうです。あえて、遠い岩手県に派遣をしてくださっている調布市さんはすばらしいと思いました。9 月後半以

降学生の夏休みも終わり、また被災直後のボランティアの盛り上がるムードも消え、ボランティア数が激減する中で、あえて、連続し支援隊を送りだされたことは、被災地にとっては復興復旧活動がすすむだけではなく､物資の支援だけでない“人”の活動の支援があり続けるという精神的な大きな励みになることと思います。

仮に住む家ができたということはまだ入り口でしかなく、被災者が、経済的に自立ができる体制まで辿りつける、緊急支援から復興につなげられる支援が必要とされていると思います。今後も調布市さんの強みをいかした、長期的な支援の継続をしていただきたいと強く思いました。

今回、特筆すべきは私の参加したチームのすばらしさでした。

とてもまとまりがよく、誰も独走したりせず、それでいて個性豊かなメンバーのわきあいあいとした雰囲気は活動中も、活動後の買出しや、お食事のときも続きました。参加者の年齢層はひろかったですが、ある意味皆様とても思いやり深く、Matured であったからそのようなチームであったのかと思います。帰りのバスですでに連絡先リストが配布され、その後東京にもどるまでにメール入力、メールリスト完成の作業を複数のメンバーが分業してくださり、東京に着くころには皆様からのメールがとびかっていたチームの機動力も驚くほどすばらしかったです。

引率の方も温かくも、しっかりしていらして、参加者の皆様から慕われていたと思います。

また、本業で仮設住宅建設にかかわっている方、TV で報道として被災地と仕事のかかわりを持つかたなど、被災地の背景にあるいろいろな活動、課題のお話をうかがい、議論ができたことも大きな実りでした。今までかかわった様々なボランティア活動を自分なりに見直し、今後どんな活動に参加していきたいかを考えるたくさんの材料をいただきました。

今後も被災地支援活動を通して、また個人的にも飲み友達としてお付き合いさせていただきたい友人もできました。この点からも調布市に集まる皆様の心の広さ、すばらしさを感じさせていただきました。

今後の活動もまた参加をさせていただけましたら嬉しいです。

今回の活動の準備をいただいた社協の皆様、また、予算確保など支援活動を可能にしてくださいました調布市行政の皆様、心から感謝いたします。ありがとうございました。

▲目次へ

林　恒美

「自立あってのボランティア」という言葉を胸に、とにかく自分のような未経験のものが災害ボランティアに行くのであれば、きちんと事前に身辺整理（家族の了解を受けたうえで、持ち仕事を調整すること）と、現地派遣していただけるなら、足手まといにだけには絶対にならないようにと体調管理や準備物等はしっかりしておくこと等、期間中はすごく気を張っておりましたので、今こうやってどうにか現地にて作業を無事全うして自宅に戻れ・・・正直ホッとしている次第です。

以下、まとまりがなく恐縮ですが、今回のボランティア体験の感想を述べさせていただきます。

■準備物について

はじめてのボランティア参加でしたが、事前オリエンテーションで、朝日さんに詳しくレクチャーいただいたのでありがたかったです。

また、ネット検索したら、ボランティア経験者の方々のブログが大変参考になりました。

＜もともと家にあったもの＞

○レインコート（ズボンタイプ上下）→防水なので側溝掃除のときに活躍しました。

○マスク→　5 枚ほど持っていって正解でした。バスや宿舎で寝るとき乾燥防護や、防塵マスクをするほどでもない場所での防護に活躍しました。

○小型ソーラー充電器　→携帯などの充電に役立ちました。（宿舎にもコンセントはありましたがなるべく自己負担と言うことで）

○長距離バスで過ごすもの　→携帯枕・携帯座布団・アイマスク・ブランケットなど、自分が快適にすごせるもの。（9～11 時間、おしゃべり＆寝ていたらアッと今の到着でした）

○着替え・小物類

○現金→2 万円（おつりがいらないように細かくして持っていきました／実際に使ったのは 1.8 万円うちお土産が 7 千円程度）

＜新規購入＞

○寝袋（人型 MCZ-5261）・踏抜き防止長靴・耐切創性手袋（HexArmor 製）・防水タイプアームカバー

→ネットで購入。

○粉塵マスク（使い捨てタイプ×2）・粉塵ゴーグル・大きめのゴム手袋

→狛江ユニディで購入。

＜収納移動グッズ＞

旅行用キャリー＆リュック＆サイドポーチで、事足りました。

■装備について

実際に行って感じたことなのですが、当日何をやるかによって装備は変わり、派遣先が決まってもバスに揺られて現地に到着してはじめて（振り分けられたり）その場で何をするか決まることが多いようでした。

実際に瓦礫処理やヘドロ除染水場処理作業の重装備をしていきましたが、草刈を中心とした農作業で軽装備に変える場面がありましたし、逆に、作業進めて行くうちに水場となり防水手袋や防水アームが必要な場面もありました。なければないで、余りある方が貸してくれたり作業を代わってくださったり（遠野ボラセンでも貸し出しや購入があるようでしたので）オリエンテーション時に言われたものを最低限持っていけば、その場でフレキシブルにできるかんじでした。

もし被災地ボランティアはじめての方で、装備に不安のある方は、気になることはまずはオリエンテーションでどんどん質問すればよいかと思います。社協の方から丁寧に教えていただけますし、最低限

のものを持っていけば心配なしです。現地でアッ！（失敗した！）と思ったことは次に活かせばいいことだと思いました。

■現地作業を終えての印象　「達成感と無力感／また行かせていただきます！」

ボランティア初日の派遣先は、陸前高田上長部地区の畠にて瓦礫と雑草の撤去で、二日目は釜石経由→大槌町での側溝修復でした。

両日とも、拠点である遠野ボランティアセンターからバスに乗り込み各派遣場所へと向かうわけですが、行けども行けども、のどかな美しい風景が車窓に映るので思わず気が緩み車内で観光気分（お菓子を食べたり談笑したりと）になってしまいました。が、運転手さんの「この先ほどから被災地となります」のアナウンスで雰囲気が一転。窓の外に流れる不自然な更地、瓦礫の山、ひしゃげた車、廃墟、赤い旗、○と×の印・・・壊滅した街の風景の惨状に、ただただ言葉を失いました。

震災以来、連日テレビやネットで映像を見ていたのである程度アタマではわかっていたつもりでしたが、実際に自分の目でみて肌で感じたものはやはり違いました。

また、「バスに乗って窓からみる風景」と「実際に間近でみる（＝体感する）現状」も違いました。

津波による瓦礫というものを生まれて初めて間近に見て感じ入る場面が多かったです。

作業中に拾い上げたビニール袋はとんでもなく異臭がして、恐る恐る確認するとスーパーで量り売りされた豚バラ肉でした、その日の夕飯のおかずだったのかもしれません。泥まみれになった小さなウサギらしきぬいぐるみやミニカーも、ついさっきまでは可愛いお子さんがお気に入りで遊んでいたものかもしれません。

そのほか瓦やタイル、割れたガラス、折れた木材、生活用品らしきものと…。一瞬ですべてがなくなったのだと、自然の脅威と被災された方々の悲しみを改めて感じました。

幸いにも（？）農作業やガテン系は得意なほうなので日照りや砂埃、雑草の鋭利さや虫類との出会い、腰に負荷がかかる諸作業など、現地での作業は苦ではありませんでした。

たまたま天候が良くて、作業も快適にできてお天道様に感謝、感謝でした。わたしが参加させていただいた派遣期は季節に恵まれましたので、震災直後の冬日や夏日の中で作業された現地の方や派遣ボランティア諸先輩方の苦労を想いました。

これからますます寒さ厳しく雪深くなっていくので、復興作業および諸活動大変なことだろうと思います。

今回いろいろな体験をさせていただき、まだ頭と心の整理がつかない状態ですが、印象に残ったことといえば、全国から駆けつけているボランティアさん（団体・個人の方）たちの存在。

震災発生から、自分が目先のことで動きがとれず何も出来ずにやきもきしていた時に、テレビやネットで「こんな素晴らしい方がいらっしゃるんだ」と漠然と思っていましたが、現地ボランティアリーダーの方々や全国からかけつけているボランティアの方々、実際に現場でお会いしお話できたりして、改めてこんなに沢山の方々がボランティアに参加されていて素晴らしい方たちばかりだなあ…と感動しました。（しかし、それでも現状人手足りないとのことでした。さまざまな問題を抱えながら模索しながらの活動実情について聞いて改めて考えされました）

あと、遠野ボラセンの方々や、立ち寄ったお店の方々、宿泊を親身にお世話してくださった菊池区長夫妻など、現地の方が口をそろえておっしゃっていたこと。

「みなさんが見たこと感じたことを忘れないでくださいね」
「見たこと感じたことをどんどん周りの人に伝えてくださいね」
「また来てくださいね」
ということでした。

地域によっては手付かずの場所もあり、復興にはまだまだ継続的な支援が必要ということを身をもって感じました。

わたしは口下手なので周りの人にどれだけ伝えられるかは自信はありませんが、最低限、自分の中で風化させないように今回の体験を胸に刻んで、自主的にできることを継続してやっていきたいと思っています。

「ありがとうまた来てくださいね」の言葉は温かく元気をいただくばかりで、現場作業を終えた達成感と、自分の出来ることの小ささ・無力感をかんじながら。

———「ぜひまた行かせていただきます」という思いをかみしめた次第です。

■素晴らしいチームワークの７期の皆様へ　「感謝！」。

調布岩手派遣隊７期。

社協・朝日さん、事前に親身にレクチャーいただきありがとうございました。

同じく社協より、引率の嵐さん、阿部さん、本当にありがとうございました。おふたかたの目の行き届いた細やかなコーディネートのもと、はじめてで不安だった私でも安心して参加することができ、安全に滞りなく行程を終えることが出来たと思います。

また、７期メンバーの皆様おひとりおひとりが、とにかくパワフルで、かつ、手際よく気配り上手な方ばかりでしたので、作業は粛々黙々と、終われば明るさ全開！で楽しい交流会となり、チームワーク良く非常に充実した実りある時間を持つことが出来ました。

あとで聞けば、皆さん互いにほぼ初対面ということでしたが、作業中も作業終了後も、始終穏やかで優しい空気が流れていましたので、まるで昔ながらの仲間・家族であるような不思議な感覚に陥りそうになる瞬間がありました。特に太田さん、高野さん、本田さん、武田

▲目次へ

老田　悦子

2011 年 10 月 26～29 日、調布市社会福祉協議会が主催する、岩手県遠野市 復興支援バスツアーに参加させていただきました。

協議会で用意していただいた復興支援バス 2 台で出発、約 10 時間の長旅。

今回は、遠野市の自治会館に宿泊させていただきます。

ということで、寝袋持参で雑魚寝です。(男女別)翌日から作業ということで早めに就寝 zzz

朝は、自治区長さんお手製の具だくさん味噌汁で目覚めます。毎朝の楽しみになりました。

7 時過ぎ、遠野まごころネットに続々とボランティアが集まってきます。

今日は 100 人程参加。ピーク時と比べ 1/10 程度になっているそうです。仮設住宅に入ると、自立したとみなされ、生活費は支給されません。

その上、一時金である義援金は 10%、見舞金も 40%がまだ被災者にいき渡ってないそう。まだまだ長い道のりです。

派遣先は陸前高田市のガレキ撤去・石拾い・草刈りになりました。その日のニーズに合わせて派遣先と人数が決まります。個人参加の方は数人で、ほぼ企業などの団体参加が多かったようです。

陸前高田市上長部地区

一見、被災地に見えませんが、ここは沿岸の水産加工場から 800t の魚が流され、長い間異臭を放っていたところ。やっと片付いたので、ここで麦まきをするために草刈りと漂流物の撤去をします。

自治区長さんのお話。「この一帯は、40 世帯程が津波で家を流された。仮設住宅を作ってくれと要望を出したが最初は受け入れてもらえなかった。後から作ってもらえたが、諦めて遠くに行ってしまった家族もいて地域の住民はバラバラに。そして前と同じように家を建てたい、と思っても建てられるのか、道ができるのか、政府の方針がはっきりしない。本当に嫌になる...」

長年培ってきたものが一瞬に流され、半年経った今も将来の展望が描けない。

仮設住宅に引きこもってしまうお年寄りも多いという。

この活動は、全国からのボランティアが頑張って種を捲いている姿を見てもらい、仮設住宅の方たちが、ちょっと手伝おうかと、外に出るきっかけを作る効果もあるそうです。

復旧から復興へ

全て流されてしまった土地から新たな命が

帰宅途中に出会ったメッセージ、逆に元気をいただきました。

翌日は大槌町に派遣。津波で詰まってしまった側溝の泥かきをします。

作業場所からは、ひょっこりひょうたん島のモデルになった島が見えます。お昼にひょうたん島の曲

が流れます。

のどかですが、先日もご遺体が二体みつかったそうです。風化させてはいけない…

半年経ってもこの状況

折れ曲がったまま放置

引きちぎられたままの電柱

お弁当にも元気をもらい、

頑張って、こんなにきれいになりましたー

2 日間の作業、お疲れさまでしたー

打ち上げは遠野名物ジンギスカン！ その由来は古く、戦時中に遠野の方が満州から羊肉料理を持ち帰ったのがはじまりだそう。

お世話になった自治区長さんへ寄せ書き。次回また来ることを誓って。

感想

今回、調布市社会福祉協議会さんのツアーに参加し、大変貴重な経験をさせていただくことができました。

支援に行ったのは 2 回目だったのですが、前回は個人参加だったため、少し効率が悪く、できることも限られていました。(震災直後だったこともありますが、受け入れ側もかなり混乱しているようで、帰されている人もいました。)

しかし、今回は移動手段も、宿泊先も、受け入れ側のボランティアセンターもきちんと組織だっていたため、効率的に支援ができたと思います。

よく、数日行っても意味が無いのではないか、と言われますが、実際に見て、現地の人と触れ合う、ということは本当に大切だと改めて思いました。

ニュースや人の話では分からない、生の、今の声が聞けます。そして何より人ごとと思えなくなります。そしてその気持ちを持ち帰って周りの人々に話して、風化させないことが最も重要だと思いました。

今回ボランティアで関わったみなさんと出会えて本当によかったと思いますし、このような活動を続けていきたいです。

また、個人ではなかなか行動し辛い人もたくさんいると思いますので、社会福祉協議会さんのようなところが、継続的にツアーやイベントを企画していただけること、市民にとって大変有意義なことだと思いました。

嵐さんをはじめ、社会福祉協議会のみなさまには、大変お世話になりました。ありがとうございました。

▲目次へ

細木　一臣

今回の支援活動に参加できる機会をくださった調布市、社協、まごころネット、日本 hp の有志の方々には本当に感謝しております。

今回参加した 7 期では現地活動期間が 2 日間と短い期間でしたが、陸前高田市上長部、大槌町赤浜と 2 日間とも異なる地域への活動となり、これは、地域別に広く状況を理解して欲しいという、まごころネットさんの配慮があってと想像しています。

現状をみると、震災発生当初の通行もままならない状況から目に見える場所、道路や家屋は瓦礫等が撤去され基礎部分で点在し、復旧が進んでいる様には見えましたが、分別され整理され積み上げられた瓦礫の山や、未だ残っている家屋や建物、地盤沈下の跡、崩れたままの堤防を見ると、復旧の最中で、街としての復興は時間を要すると感じました。

また、今年 3 月まで在った街は無く、こういった状況をみると地方に避難又は仮設住宅より被災地域に出向く事は辛いのではないかと思い、簡単に”がんばりましょう”や”がんばってください”といった言葉は言えないではないかと感じました。

陸前高田市上長部での農園予定地での清掃は、今後この農園は近くの仮設住宅に住まわれている方々で農園を創っていき、仮設住宅に引きこもりがちな状況を改善したいとの話でした。

他の活動でもそうですが、水路や建物の清掃等を行ったとしても、今後の計画によってはその土地に重機が入り更地になる可能性もあるので、実際は作業自体が無駄になるかもしれません。ですが、作業/活動を行う事自体で地域への活力につながる事も考えられるので、全てが無駄ではない事だと思いますし、こういった活動も重要と考えています。

また、今回参加して報道が沈静化して震災支援が風化していってるとの話がありましたが、個人的な考えとしては風化していくことが悪いとは思えません、確かに支援活動が必要であるのに風化し、支援が手薄になる事は望ましくありませんが、実際に家や家族を失くされた方々のお気持ちを知ることはできませんが、普通の暮らしに戻り、県外の人は観光で訪れるといった、かつてあった生活に戻りたいというのが多くの人々の願いだと思っています。相当な時間がかかるとは思いますが、普通の生活の日々に戻っていくとの意味で風化していく事が望ましいのかなと思えます。

状況から長期化する事は予想できるので、今後、個人的に或いは今回の様な活動に参加して何らかの支援を行えればと考えています。支援活動に携わっている方々の疲労も今回参加して感じましたので、私個人は非力ですが、少しでも力になれればと考えています。

被災地域の方々及び、支援活動に携わっている/携わった多くの方々が今回の災害で悲惨な体験をされたかと思います。その悲惨な記憶は消えないとは思いますが、願わくばその辛い思いを軽減できる様な生活/状況に戻ってほしいと願います。

▲目次へ